漂南新話

全

ル 2
1239

門ル呂ス
號1239
巻

112

漂南新話

外國叢書　十二

漂南新話

小引

此書ハ往年奥僻乃舟子等逆風ニ漂流して東方
仏島ニ経歴し終ニ唐山船ニ送られて帰朝
せし其物語抄書を先にしるす始にハヤセといふ小島ニ
漂着し夫よりバタンカヽヤンこ子うなどいふ島々を経歴して
是等ハ唐山乃南京道以南ニあるよしなり是等ゟ
青門といへる地ニ送られ廣東府ニ到りそれより前後の事
を別ニ記せしものあるや言ふ處の書門ニ在
日見せし事を乃ち記せり

寛政己未十月

漂南新話

去冬し松前城下に於て商家の傭を九月九日我海濱を
出帆し 舟ハ米百石積運ふ程の大サ也 同月十六日松前に着岸し同所にて
米酒乃類積入同廿五日蝦夷地に出帆し十月朔日蝦夷の
シツ子といふ所に入津夫同所にて塩魚を交易し十一月廿
六日乃夜半ホシツコを出帆し同月廿八日松前領汐首の崎の
南部尻矢の崎と向ひあへり 島にて難風に逢洋中に流され傍島形も見えす行事
我海へ投捨て檣をきりて家に二日我強るめても烈風止す
怪浪驚る波静まらす東北方に吹流されて三百里斗少し
波も静かに成りて潮音谷川乃石に咽ひ洪水岩を遡

しるしもなくわびしき音のみにて四方に山もみえず唯大洋
に漂流す四月より雪なし降る水乃多し少しづつ集めたる
ものを三椀づつ一人分ちし与へける水も尽し其後米も尽き難
又潮にて菜食す
幾日ともなく海上漂ひける内へ船中の者困窮し甚
薄金毘羅の神祈念し居るところ未申の方に当
りて船乃形の様なるもの見ゆる未申の方に船の走りける
十一月末頃より雨降りける故船中の者皆器にて受けその
水を用ひ煮食し命をつなぎたる程の事なり一椀
乃米の糊のごとく皆に配分し食せし丈夫なるものもやせん

此三四日のかぎりにて落のうましきに食乃其頃四方の気色
分け日月は海より出て又海へ入るなりいかにも入る外にみへず
見えるは暑気甚しけれども雷なりける船中暑さ強く
続け綱の如き海の水を飲みける愁にて船中暑く船板の
あぶる如くなる焼石を踏むごとし
十二月七日頃よりは米もなくなりて只喰へき水も尽き既に
定めし水もなく飲み乞ふ様子を見けるに誠に苦しく二十日位
余り煮たるを焼きて渇の出るにて食ひ十二月末には水もなく
くるしみける大晦日も暮れて皆集り元日には
甚しく悲しみ歎きの只佛神の祈念より外にはなき事にて除夜

舩霊両頭つに降皆ゝ快く水主のこ又ゝ之容易ぬ残
多くハ元日よりうまハ船神へ神酒をふりく水主棒弟
皆くれ雑煮祝ふをく彼淀継二寸ばかりもきりともさを両
水にて煮てのそひし如ゝ正月二日美輔飢て死せん
正月七日ゟ十五日まで雨一滴も降ず貯へたる水ハつき
十五日の朝天くもりて雨を催し多く衣を脱ひ船の上にて
雨待に出しをかりけ雨ふりて帆の濡まうらゝ器ともを悉
出て各偶に請て（丸）ぬ事に帆り只その家族皆水主浮ひ
かゝ三銭すひ浮ゝる唇はあつ掬ひとれとも放まて（丸）嬰兒
乃乳母り放まて（丸）家猟る船に座て風吹来り船纜

其家帆も乾きたる故へ注こやこし此
元日に船神へ備へ置し新しき扇と紙に包みたる銭十六文の
船ゟ家水に漬ても未だ濡ず昨日降たる板にも雨また微
雨ふりたればなしてあまりし人ときも皆不雨の降るべき神の告なり
あらむとぞいふて祈念しけるか
此時大きなる鮫船に随ひ泳ぎたる事二三日能よきを制
して乞せしに銭母子まで細綱を以て引かけて投かけし母
尾まで引上げ鉄刀にて打殺し肉を水にひたして十五日かゝり
家く鮫の腹肉より出たる濁汁又ハ脂あるを煮て皆と
悦食しけれとも十八九日まてにハもや濁汁も脂も尽ぬ薪又

竟に船具乃焼盡きしも果て古網を焼中に焼鮫魚
乃肉をも去六日乃糧食しけるに此魚の身へ肉腐りける
ものへ捨りハ惜けれと海へ捨ぬ
十八日ニ不近所ちかきにて蠅下飛来り船乃飛車と云ところ
にとまり暫しく飛去又翌日も平所に飛来る是其て
こゝぬ蠅乃地方近くなる事しるやと各悦び居りしに廿三日ハ
日夜大雨降り又食との罷まる一升ツゝ呑定めし水斗り
飲みり甚ツ余りも流罷残るに来申乃方へ向て乞ひ念
祈念しき方に磁針を立あ行しに廿四日船中食具乏
用に曲物に蝿乃細をとゝのけし残こそ各悦びけり

廿四日小島残見ゆ皆々悦びあへぬ此島へあらんと皆々
中せしに船頭呂の拍子残る小周廻縫一里斗足すけ樹木ハ
あく家より人家乃見へず ちあらされハ此島ま上らんと船
ハ岩に碎まき島中に便さ無き處れまき所ハ瓜てせん小島是
大魚乃根あれハ舩て為よる無き島にあらむ帰罷ま任せ船
残ませよねて行しに小島八ツまていえしも大島とて八ツ余し翌廿
五日に通り大嶋ミえし小方残得急ぎしに島ミさ當に
着しれ彼方此方と廻りしに岸高く荒磯にて潮ふく船
漕はつききりし残漸棹まて岸とく寄はせしに岩石する
とくしてれ折からしきをも厭すれ岩間を傳ひまち上りし

り船も忽ち波に砕けたる皆々飢て力なくして潮に溺
るゝ斗なり船はちりぢりに辛き命を助かり岩石を伝ひなからあひ
かゝる小高き處に這上り然るに丹二人家かりやあると尋ねや
見しに暫くありて向ふなる細路一條あきらかに人家へと行さる
くらされは船頭は行く路乃あるかく人家の無事やと尋ねて
覚束なく船頭は猶に先立をさし岩角を攀登りて小高き處に
上り四方を望むに日既に西に傾く東の方は嶮に細路ありて是を
伝ひ今一きはも高き頂に上り能々見れは芝生広々一丈ほとの里
五六尺の鳳尾蕉あり我生国にては見馴ぬものなれは異国にや
と初て思ひ悲み途むなきに高山あり山に煙乃立の

ほるあり是を炊煙ならんと力を得て煙を目的に山を下りて沢
に至りて見馴ぬ奇樹怪木（此土暑気強くして木の堅実を茂らせず）の生茂りたる
密林に細路のある故杖を力に一二町も行しに芝生
をまた六七町も行き茂林に入る我いかにやと思ひ目的の方
を失ひぬ森林の中の細路二岐に別れたるはいつれならんと十方に
迷ひ腰より矢立を出し袂の内に紙の切もありたるを取て左
右乃文字をたゝみ金毘羅を祈念し占ひに試て右の方
に当りし方角の路を塞きたる故杖にてかき分け行しに
数日飢疲れし方足もたゝす心ろ迷ひぬる故にゆるく行しに
高くされたる坂あり坂を下れは又林あり目も暮れたるもの

林を過行ハ道ハ廣く草も生ひ茂り星あかりも見えすといへハ
馬繋ぐへき杭あり扨ハ人家ありと思ひ嬉しく急ぎ行しに
犬の吠て来るありて丈にも知れす行しに燈火の漏るゝ家
蓬屋ありて戸を打たゝきし處に便りなき窮人なり何とぞ一夜を
起さんと日本の言葉にてハあらんか手まねをもて案内を乞
と應せす再三言葉に乞けれハ頃ハ中にあらたに出て戸を
あけ内より出来るを見れハ年頃の人なり女まても年は
十七八とも見え衣はきたれとも裸にて褌をしめ何かを言ひて居たり
見るに及ひ言語不通腹を敲き口へ指さし銭をみせて
不思国をくりかへしするにや甘藷を煮て与へしか黙しけれ

褌をしめ人なり木をもあらはにて作らせし

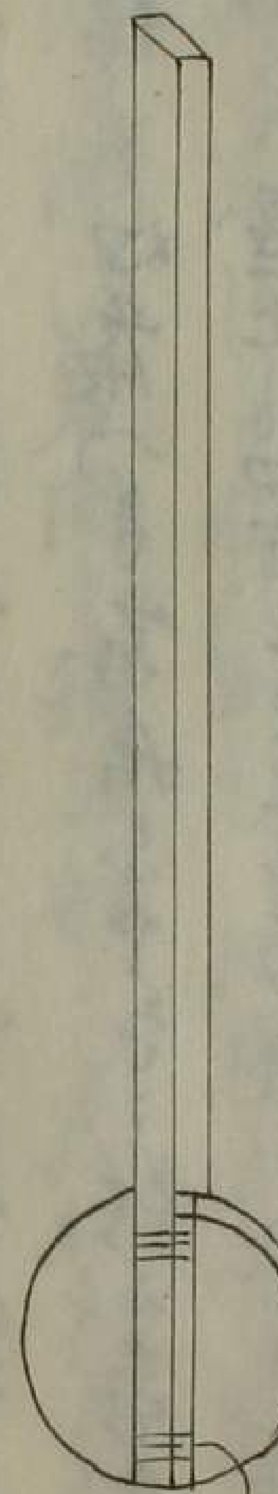
むこ生得て土鍋にて煮て大きなる木の根の如きもの出しける史
快く食し彼に猶も求むれとも打頭をして頼ミ前様にも示して
みれハ其内目覚されハ双親とも見え一人の男子頭ハ總て耳の上
まて剃て一人の女ハ惣髪にして皆裸なり

我らおそろしく若く見え又来り来り
甘藷の葉にて銭截出しける快く食し演出て礫し出し
者共を銭差の如く紐して世迎ふる事もあらさなハへも此てる形の
漂ひしを見しまや知る家もなし甘藷銭二三十まそひ
あたへ銭を入道五六尺人の木の下に出ひ付迎ひ行しに出立て行祖
小きの家ありて腹や出たりけん一足もの行きし残しゆきしも

思ひれ心ならずも打あつまりて家に帰りぬ其日も暮て此
外翌日に至りてはさまざまの人々にや二三人寄り何も物言はず
各ちらちら只轉失氣の臭き毎にへんな事を人々皆するを不思
議しと思ふ乃きかれしますに人々我船に七八人寄り乗
元乃漢に到りて踏ませし者乃歩して左の方は岩下に居り
三人の者は春水より岩下の水を持ち還り居りしを
岩北一跡白ふるまゝ見ゆくぼみて山水残留也
我往し我飯に何か飯ひ
穀さへ食ふや忘れん我々の止めるを押て往きて皆に打驚き恐居りしに
飢ゑ果てし其飯ひあふれしに異國人日本人の乗りて破船
波に漂ひ岩間に残りし船よりの有りしに釘なとも見えるなく
行ぬ四人のものは甘藷に飢ゑを忘しの事異國人に請まし家

に帰りしに四人打まつりて出向ひ行ぬ只船頭をはじめ家に
帰りて心落つき家居なとを見るに家は高さ七八尺軒下三尺斗
にて屋上は四方と萱にて葺、四方に小き窓あり戸と覚しき所
に三尺斗の板戸あり其板斧にて削りて家中の板敷も同じ
く板なり朝夕甘藷斗食ひしも間には酒をも出して
酒は甘藷を絞り（其絞り具も今日本にて砂糖を製する具なるへし）其汁を壺に貯へ何
やら山より木の葉を取りて擣きて其壺に入三日程も経て
その中に泡を生し其時の香は日本の酒よりも甘くして酔
ふことは同じ楠の木の実の下に團なる子ヲイなり其酒
の家々にも製して其周りに三四疋も山へ携へ行家畜の生

熊を連行打殺し直に火を付毛残焼落して皮を剥
皆して小刀やうのものにてきり肴として酒をのミ終日楽ミ
夜に至れは帰家若獣肉あれハ家内もちもち家に帰らす
平日酒を呑れは船なし希にあれハ其ふ舟を持て出
尖釘として莉藤を紐と為る尾葉を以て塞き形ち
日本の漁船なりハ称して蝦夷の形に異なる揖
図左のごとし



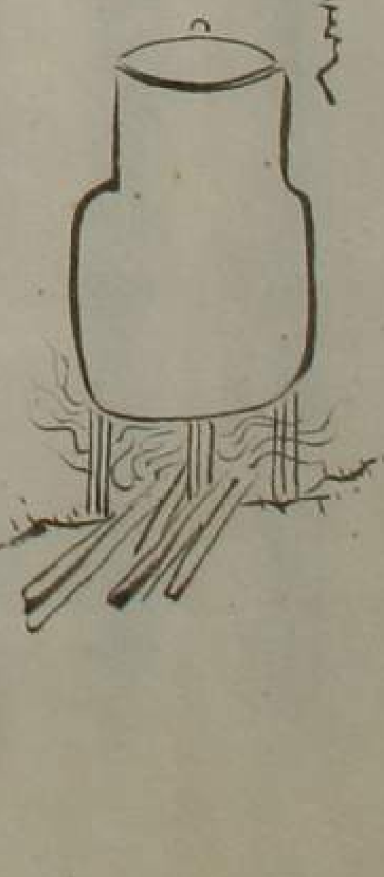
なまりハ漕ても速く器ハけれ共ハ魚とる事をなす 五穀性なく胡

夕の時は酒のミ楽しミ春秋暑寒甚しく志て衣をもちし
唯蚊の患なきのみ所に七日程居隣人と我等の主とか行
夜をまち我しの草履を前にかくなし此ものは皆きしたる草履をせんとて
集宛て草履を抜へともも由
外へ出く事かんなく二人を連立行にかゝりいふ所
試合人に集中て揃への舟子共に二人まで出きて表へ橋
泰郎の秋田産居らし所皆ほか行にこの所の前のやうなる家七
八十戸ありしに吉太郎の居る家は雲を見しき所り
あり其所に和蘭人のぬき衣をきて見き革の冠を戴き襟も
のとのとを着あるとの四人円椅に腰をかけ居たり髪ハ三ツ打に
しく後へさけ四人ながら銃子をもちて橘泰郎に何ぞまのよふ

乃くわ居かく同し處に来りしと同しく此四人の者きまのふ来りて
残らを外へ連れ無き椎子といふものを取て米は飯を食ふ
其夜ハ宴ふ歩宿まん後に此ふ乃名を告てイシバヤと云々

此ふにて飯を炊甘藷なと煮ふ事なと皆土鍋なりしかくも無し鍋又ハ鍋のつきまてハ或は石ふ小ふなと三ツ足の器のめく土へ建たるき火をたく事如く

砂鍋ハ図の如く 茶のうちもまたやきもの



此ら池井なし雨水 又ハ谷川の水なと炊煮に用ゆ甘藷なと培養
するに塵芥を灰にして用ゆ
木の葉なと年何の木なと実を山より取来て食ふるなる正月
胡蘆の蔓ふありし 地にあるむやうなるもの大きなるなと上をきりすてあしうつくしく水なとを入る器に用ゆ
五六升程入無き壺あり是を酒くるしてやまとかるまる此

七此處にある寸酒水なとゐくもふる器に用ゆ
家居の戸鎖鑰なしたてつけもせしむまく
ガレンとを角三段へ曲て目口細く黒白の斑にして狗程の獣
あり又ヤギといふものと云ものもあり
夫より程なく四人の官人に連て海濱に至り夫に此所より山岸まで
く岩石すらく下る所き無しかあしきに此高砂濱とていふく云ふ
岩石の岸下に船弐艘あり彼四人ハ先に岩角より付添乗り
此ふ官人のうち十六人のり（日本人ハ二人つゝわてのりしも）座して順風に帆を揚し十一日此湖を
乃島に着く（船乃うちハ布にて包すうふとし一艘に十二挺立てる 此ふ湖をやくして東へむかう事のなり）
島に上らんとする時船より鉄炮なと二三発し上る（島の右をバタンといふ ここより六里程幅も七段）

二十一本作六七

し船付の此之名様
サントロメクをいふ

大きなる家なり 官人之れに住む 其家板敷く
之筭様左右に鉄炮二十挺をかざりあり 夫より三室ほど奥へ入れ
通りしに二間四方ほどの室に女壱人常に住む 奥振と云ふ所に
帳掛られ（帳は白木綿にて ぬいかざりあり） 少し持上げ所有り 我らをして 起あがり
あぐらをし 傍に酒のあるをのむ其内に常に帰る 彼官人の
とお答し 土蔵の内へ入り 奴座敷は 畳四方八枚にて 中を
穴藏あり 胡四ツ脚又古器より呼出し 常に其前にて 食を
すゝむる事を丈帰ありよくろく外に 倚子 食床 掛役 其上には飯
おのゝ佳肴種々珍味あり（えび魚家牛羊ホ様 食之に調理すなり） 悉く南京焼
の皿にもり 箸は

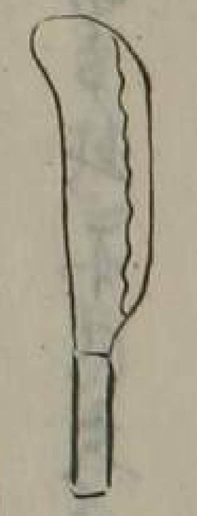
和蘭ホルコ

かくのごとし 外に小さき

刀メス

匕レーペル

刀あり



柄にする木を則携す あまりし黒き木なり名をヲハモ
ンといふ甚多くあり 堅実にして黒角へ似たり 此刀肉
を切に
用ゆ 又さじあり

汁ヲ吸ふ
為ち也

我らが食床にすわり食をあひぬ四つ時イシバヤ殿の助なき様
にて此様で箸をわしらへ持出し 我らの食床にも四升入るほどの浅碟（さはち）
飯様八分目程にもり 肴ならび 鳥魚を持 者を頒ちの 茶碗位の杓子ほどかからず
立て出しなお席我もまた杓子を似たりなれば
夫より後は製し置お杓子様添て出しなり あるは時魚菜吏婦其れは
我等のゝ食事志なりしに奴僕共集り食床の上の箸物をはな
をを入食ふさき大制するはなはずに文或は飯以ちりしかき残き
至るて庖人奴僕ともよひ大方のなき猶又甚後も飯も多く不禮
なるの事ぬし素ぶり 云御の事ども何ば褌のにはしって食す事

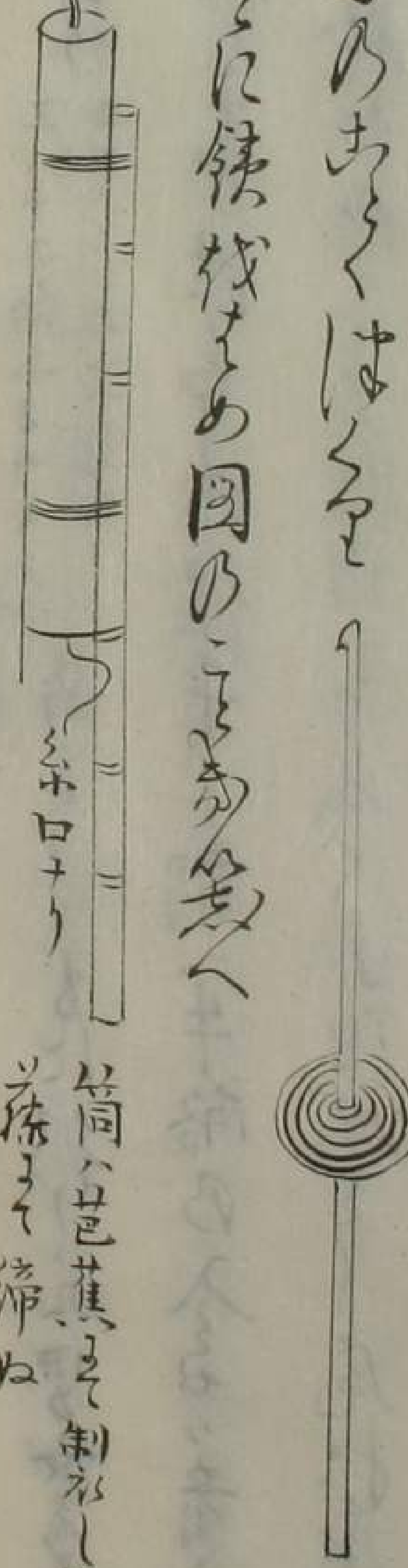
ボア按檳榔なり
木葉蒟醬蔞葉なり
ボア安南テハカラト云
ふく捺りて食ふ
鉢灰カルレイ
客至以扶留藤檳榔
代茗
丁機宜
竹枝詞

箕乃やうなる物に甘藷乃煎したるを多く入皆々丈ヶ高き
食ふ丈ヶ引替我々ハ初音の食する物に白砂糖まぶして煮たる甘
藷など二度乾かしたる煎茶へ（菓ハ浮ちよりある由）に砂糖ぬり置のませて付合せ
乃菓子饅頭なとをたべたり 此饅頭ハ麦乃粉を甘藷乃あまき汁ケ
和し五六寸乃大さに餅乃めくし先座つゝめ の内に大麦を煮て糀を去勢し灰乃中へ以て座つゝめの口を密封し
暫する時ハ手附自ら香気を発する其時出す食する時針を以て切用ゆ
ボアと云ふものあり木の実ふして大サ一寸餘上にも毛あり
皮あり内に実あり是を削色乾ハ甚硬し其實之何乃木か
知らぬを採白く煉たる物の様にてボアと同しく食ふにボア甚軟
にて少し味淡くして甘からす是を食すれハ唇歯咬噬すて
赤くなる此木乃生のちひ（馬尼刺）て子うすて甚嗜む

○カヽヤンの條の頭書と
併せて見へし其地異なる
ことも此通俗乃風習
を知るへきなり

又或時はサントロメクより（常の居所より）三里ほと外なる所にエバナといふ所
に別荘あり（エバナの向ふにはサヒタン エブクレと云二小島あり）島主ともに行しに男女多く於
かし庵人たち先に往きて佳肴を調へ牛酪乃入たる着しを
小豕乃全体を腸を去腹内に米を詰くの入たる様をして尾は處まで
首へ串きするゝめくあふり是を盛りにあて膏梁醇酒にあき午
時に及ふと皆々一睡す（其土地熱して昼前より寝之事一様にて同し）午後に起く丈ヶ高き
又酒宴を催しそれより帰る（又もち乃まゝ白きぬり乃家もあり 屋根葺ハ漆にて葺する木は様々にて他に
家多し 又其屋根もあり床の高さ八四尺ほとにて下部の方ハ皆土間にて居す）
島主は浴室ある石造を穿ち水を多くたゝえある熱き
ゆへ茶乃加湯をなし

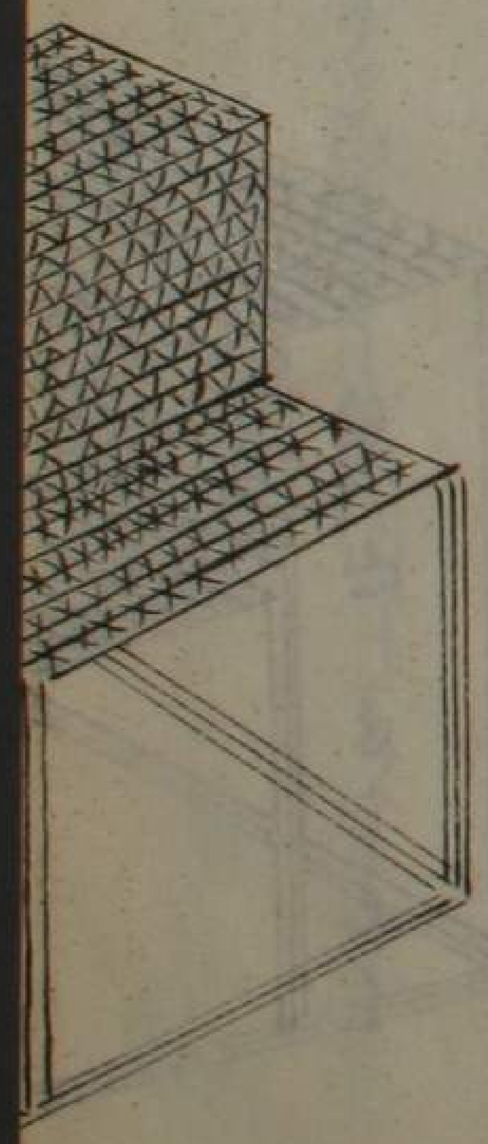
婦人の虎子ハ以川とても備へあり寝床の下に置き並男子の
前とても悍手二便す卑き者は居所にて二便する也板数は
互ハ家々に取り様あるに今略
エハナなとく機織なり然るに其機具日本にて小児の戯れに織
具より遠ハ其織ところハ木綿のこと此所に稀なり自然に生じ
たる木綿なし綿ハ縦出しやう弐寸余もありて太なり流也
木なく苧のおくはくる也
四文銭ほどに鉄线なる図のことなる也



綿を以まはせ线腰上にまはして糸を線繰出す

按文字伊斯把你亜国字ナルベシ
按芭蕉葉ハ柳葉ニメ所謂貝多羅ナルベシ若クハ此土ニテハ芭蕉葉ヲ用ルカ
○寫嗣 和蘭ピン子 墨斗 インキコークル とゆふ

嶋中にも学館あり又童子の書或学ぶ所あり五六間に三間半
程の室なり卓を骨を木にして畳のおく敷に笛林程に高キ
ことにて細代にてたり高さ三尺五寸わかき幅二尺五寸わかと二脚
かしく弐段めに坐し書を学ぶに文字を紅毛文字のやうに
紙をなしここに芭蕉の葉を一尺ほどにきりて用ゆ筆をば鷺
の尾にて製すれはバボとんふにる尾を上にむけてバボを硯
ならし日本の通人の用ゆる墨壺のおく木にて造るとの
ハ墨を載ゐくハへをも也



和蘭人是をロルヒタバコといふ捲煙の義也

煙艸を巻て吸ふ者之

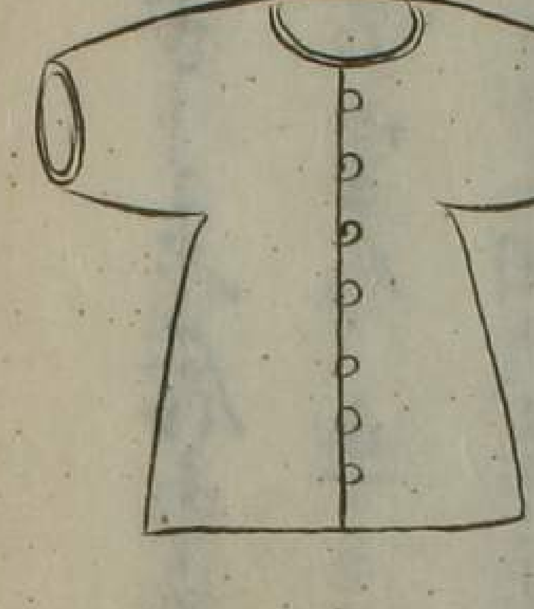
かくのごとくして細きほど火を

はし太き處を口にふくむ又ハ芭蕉の葉を細ク剉てセニヨラン此用る八上

鼻烟和蘭人スナイタバコといふ

也色糸にてまとふ又卑賤の者ハ煙艸を粉にして節へ日本の樹

燕やうの物に入て是を鼻中へ吸むセニヨランもよき女のする之



△クロボウ辞してサカモンヤといふ僧侶の輪袈裟是より来る物とき〳〵熱国の眼なり

急を一ち外官人の衣を和蘭人のぬし只肩に

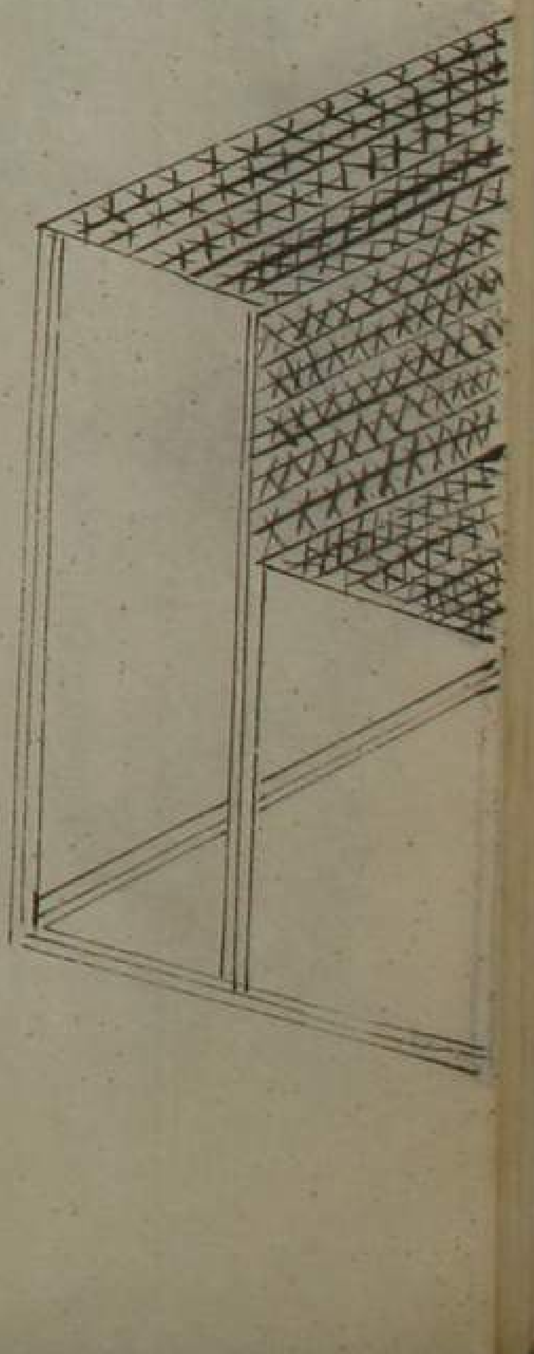
婦人しきのぬきころの此ぬくのごとくおく

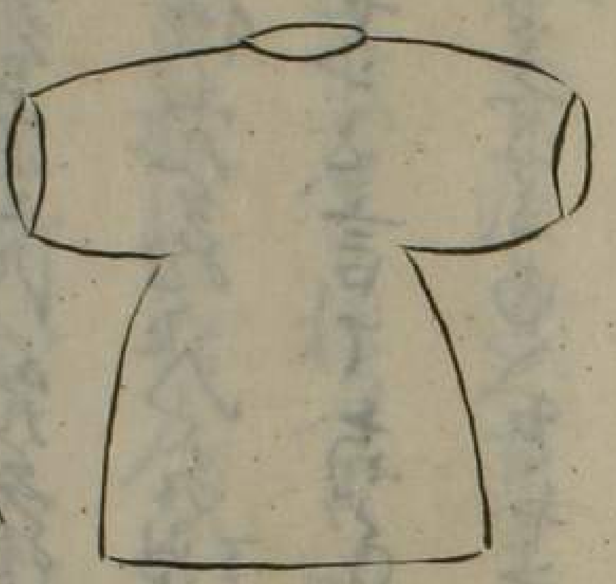
かくの

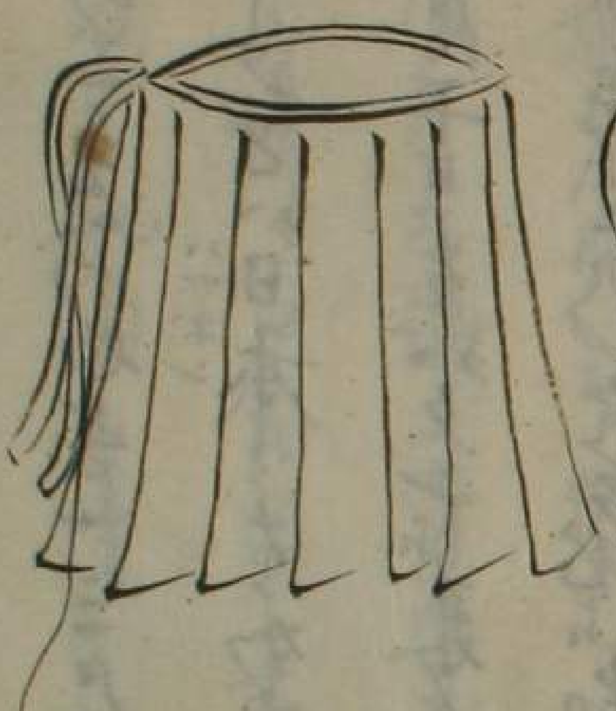
襟

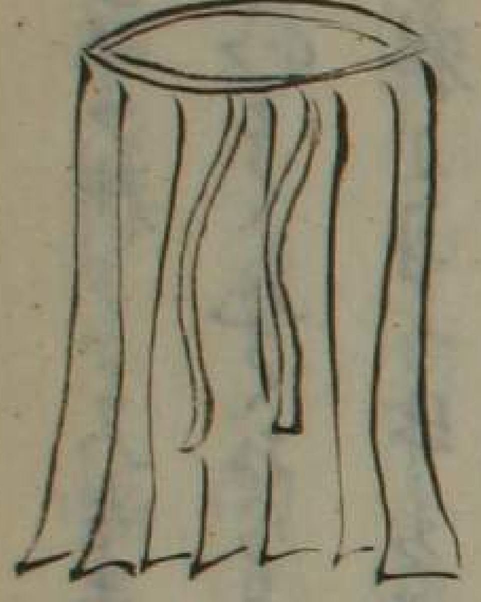
肩まつけ前ハ針

まてと見ゆるなり









卑僕乃者の衣を只袋のごとく左右手ぬひ着する時ハ首より入る時こし袋のごとく

までなり

此袴十二幅乃体なりひだをあつて紐のごとく

糸にて紐ゐき人ハ袴ニ付し上をひだに作

末にて又木綿にて糸にて繕なり下を白

木綿卑賤の者を木綿もかりなり此袴も

首よりはくなり

此衣の裏は体なりたまと結ぶとはるへ

又かくのごとく手より組ひ出しあるもあり

牡牛なり和蘭ビユツヘルといふもの也此方にて水牛と呼ものゝ類なし

西洋人日本をヤツパンといふ其轉声也

此地の耕し又ハ車ニ用ゆるノアンセルと云牛あり角ハ
弓のごとく尖り全躰黒色にして常の牛よりも大なり
食料ニ用る牛を常ニ野飼にしてあり又角を細工
にも用ゆ毛色も也廿三尺ほどの丈ハ四寸ほどの牝牛甚多し
我々を日本(ハツポン)とかりよふ

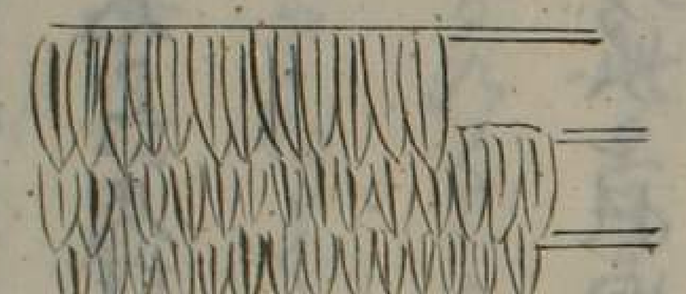
二月十日ニハバタンに来り四月二十一日まて此所に滞留し四月二
日ニ出帆の内船頭ハ数多く伐採以て持運ひ俵を作く
受取穴へ入る此出てテラの治る出入ハ(てテラよりくる俸米ありと)船ニ乗り穴ニ
ガバヤンと言て南ニ拭合を息を吹出し船の風を起しける
状なるゆへセヤンと云所へ着きける皆々ハ喜ひける

其翌日濱邊に出て島上ニ至りけるに六百石積船と百弐
弐三十石も積べき船弐艘形蘭船の如く形ちの岸ニ繋り
〆弐艘の船人を伴何ゆへん島より付添来り船ニ載ける
船中座所弐ヶ所あり上ハ船人下ハ我々にかこふり船ニ小船
人の方ハ識ニ膏梁美味なれとも我々ハ唯甘藷ばかり支
たへ乃快く食る事ならぬ所舟子ハ情なき罵りに
タンにて飢渇をしのぎ肉乃絶する事に此船中廿七日不と
乃海上ニ又大ニ飢るなり
上ニ向ふエバナの向ひにあるサビタン。エブクシ又ハバボヤン エボコシ也の二島乃
ゑ敷甲なし幅ハ三尺位厚サ弐歩ほと又大きなるは壱寸余

乃厚さ〻なるものあるよし本地の業入乃やうにこゝろえたり
イシバヤへ到りし時暦も船に捨置たる夫故に八月日をわかち
へなるに哉生明(ミカツキ)みて既生魄(イサヨヒ)をしるを以きたり
カヤンとおもきハ船中の巻あしき時食ふ事ならず傭借と云
弐十余年より此船の事あり船へ入ハ下僕に六七人の事故我々も
おのれらあり文字を日本(ハッポン)とよびし通辞の様子に
ゆへ飢しハ渡まゝり宿より所々呼に来して以て度く食る所
ともり扣此土の風土をとるに家居は間まあつれ仕切ありて
四尺程乃高さに床をかき(床の上に敷物あり)其上にて住し又ハタハシと云
席を生す(席の事下にあり)屋上ハ此の如く葺たる事草かやにて葺

蒲乃如く水中に生するものありたけ

弐尺弐三寸斗葉の如く横たけ四五分ほとに草を編合せ
草此中央の筋枝まてくあつけ背もあり此草堅ゆへ



又かくのごとき水草あり長サ
三尺程もありて葉もたれ
独のく又此中より出るを
裂きて筵に製ス

此土にて何事もこれを取来るもの造花枝はくる草あり此ぬ色

太サ七八寸長サ五尺位も草色
かくて乾けハ此ぬ色人をも刺し四稜ありてその稜より裂き

有水艸織蕉心蓆
満刺加付枝詞

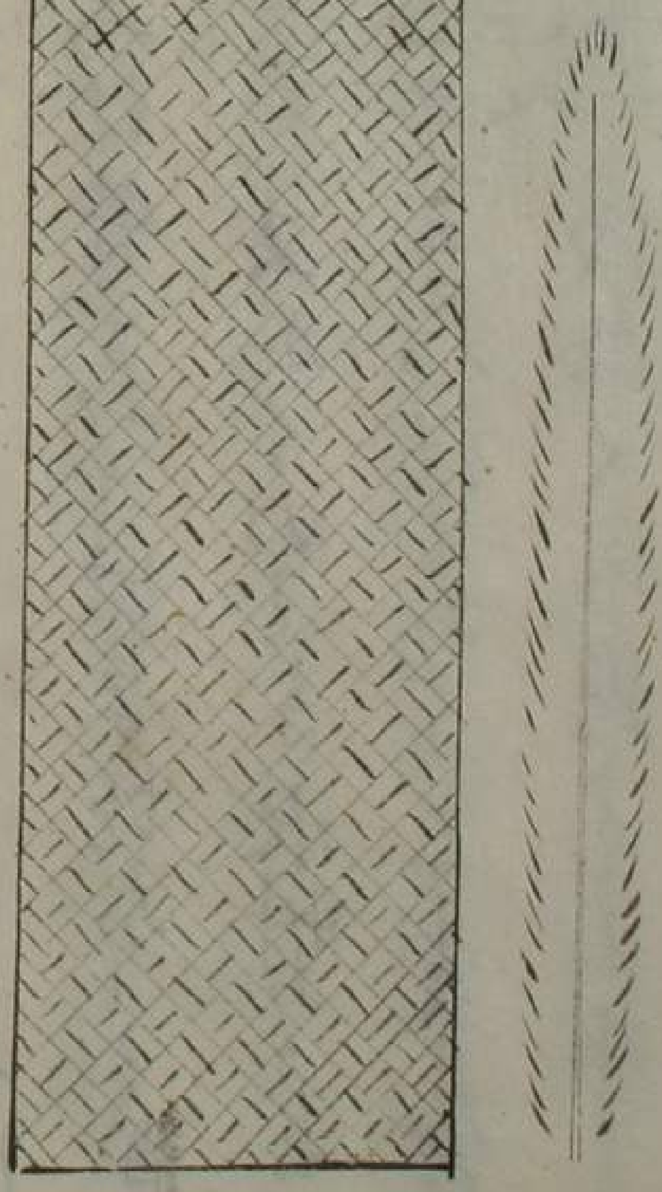
以上芭蕉ある處にて包を結ぶ

ダバン就制れある草形蒲のごとくして根遠あり嫩時細ニ製ル席と
しれ又赤黒ニ染用ゆもあり 赤ハまた赤黒ニ染細く二歩くらいニ製ル席と
十甲編のとれまた三歩くらいにて不絶染
三尺より六尺ほど又ハ九尺斗なるもあり或ハ葉の笠なとく笠ニ製す

按芠草蓋イフ
アンペラなるへし

ダバン之図

席ハ
蓆を
あし
むのこ
用也

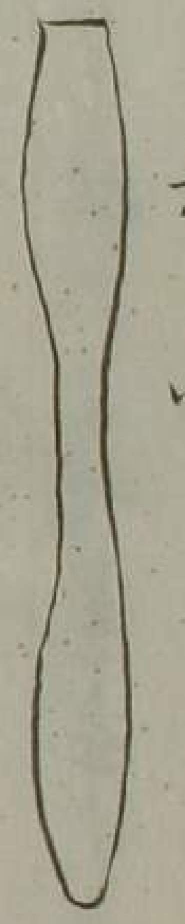


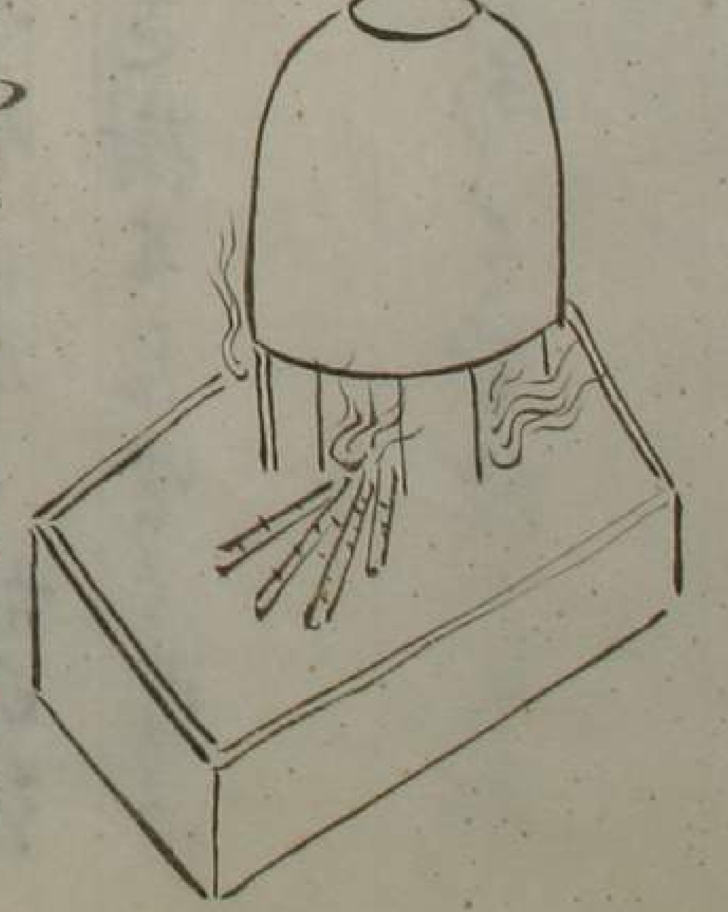
此土イシバヤあるも遠ひ持下ちく一丈よと取り二便ハイシバヤ
バダンは志とし

Cuengkie
占城
十更書夜鼓冬〻午起
子眠風俗通三尺竹竿
輪灌酒満城歌舞解
月明中、[註]非午不起
非子不睡見月則飲歌舞
為楽十人五人囲坐以竹幹
挿入糟甕中輪吹吸[図]
羅〻
〻〻〻蘆管千人捲白波
〻〻〻[図]〻〻次蘆管
吹酒就盡飲之
右
尤侗外国竹枝詞

此土には川形にて何事の形よりも酒様磁瓶に入多く貴 武斗程
あるる一月ふ三ヶ度不ゝ院市あり酒の美悪味を壺の口より竹
此管様入来るの様也去人ともへより多くの也時ハ吐之焼酎の味
之又此土にて製する酒を山より来様取来り日本にて焼酎様
とるめくしてく製する味甚辛しいさゝ樹木に深く咲ちハ
別にわらく様ふめゝ別家
男女の髪をバタンのめくしてく保ちふあるを皆縄より見
結ふる水口なし素足なり
朝夕乃食ニて玉蜀黍様飯とし食す牛製蜀黍を臼に
入水を洒き皮を去細くして飯となし又官人ハ米の飯様食す

此土も皆けしに塞りて食ひ得ぬ飯の付たる所は笊箕の
子持上に落す也下には竈家ありて拾ひ食ふ
玉蜀黍飯製する具は図



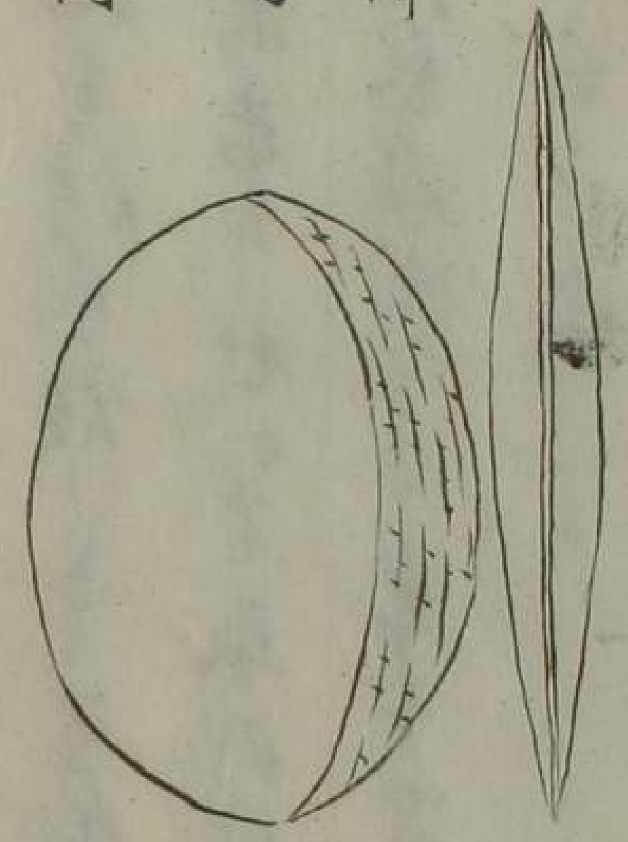


図の如き竈は釜は上に蒸諸物を烹炊す為に蒸器の
如く板にて　竈は低く灰は入厚さ三寸斗歩程に積
さ四尺にも及ぶ程也にして薪は蘇木(すおう)紫檀の類なり
鍋は飯は多くは八砂鍋家脂なしと覚ゆ家は八銅鍋也

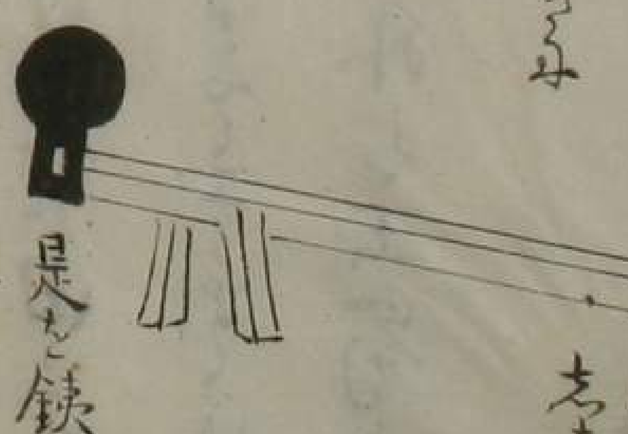
田はあまりとも溝洫なく雨の降ば待て雨は稲秧
となる時は何の煩しきこともなし苗代なく直に田に蒔て
米は赤米秋刈り取の後田に種子蒔は生ても干乾き
糯米八家の食とす米は皮金食し余は玉蜀黍飯
甘藷をかり食とす
馬は小さき馬にて牛也耕作をは肩に負ひ荷物は川船にて
運漕す又島ところに頭白く韮をまくなり
酢を製するに甘蔗の漿は壺に入る半月乾して十日
程経て飲とす酒とす用ゆ
綿は在中竹の節は四尺程方なるに挿入上は牛皮を張りて其

上ニ路をなす四尺余の竹杖に鉄を以て打附ハ日本の路の如く明し
マンカア実といふ木の実あり形田貝の如くして三寸ばかり味甘
して子ラヨハ名〆 粟 菓子ニ備あり
此さ椰子樹あり 方言子ライといふ 樹の圍三尺ばかり枝なく葉を
尺ハ実ハ其形を圖するごとし

椰子之図



椰子殻を磨きて作る具の図



此木を用
膝にて志
志きさむ

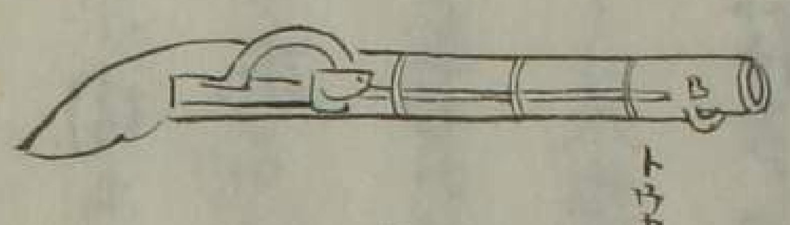
是を鉄にて鉋のごとくす

枝なく頂に葉あり 樹の形竹の根に似て末にあるまで竹にあふれ椶

椆の如し其実外は硬き麁皮あり割ば内に又甚硬き皮あ
り厚さ三四歩堅き白肉あり二分ばかりにて飲食の器とす 又中に
和らかなる白肉あり厚三歩ばかり甚甘し小刀にて削り白
又是一箇碗となる 塞ぎて是をもって文調べ甲の肉の
器となる無く堅き皮を磨き合て磨水に和し飯に
作る 又磨き合し家焼焙を吹て沖に浮べ焼酒
ハ樂みにて酒を飲む 周りの縁はかすハ飯に入此貝ハ
何やら甚き貝にてする此貝豪富の者ニ所持す
鉄炮とうハ云ハタンにて子ラ柄も皆円く鳥銃の筒先に
乃ごとく柄をはなち放川の如き茶屋の捨を取て捨する

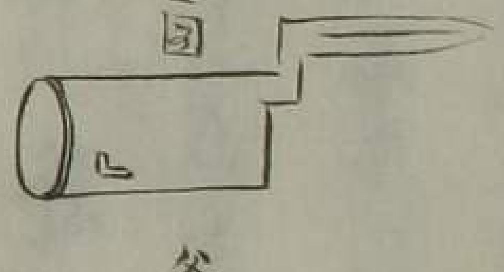
とら寸只武備を二尺寸のことく西玉筒の長ハ皮まて鳥の如くなる
日本笠を片手にもち弓を一斧完を鉄つるの長さ斤斗ハ鳥の
如き小斧を納入れ

鉄炮之図



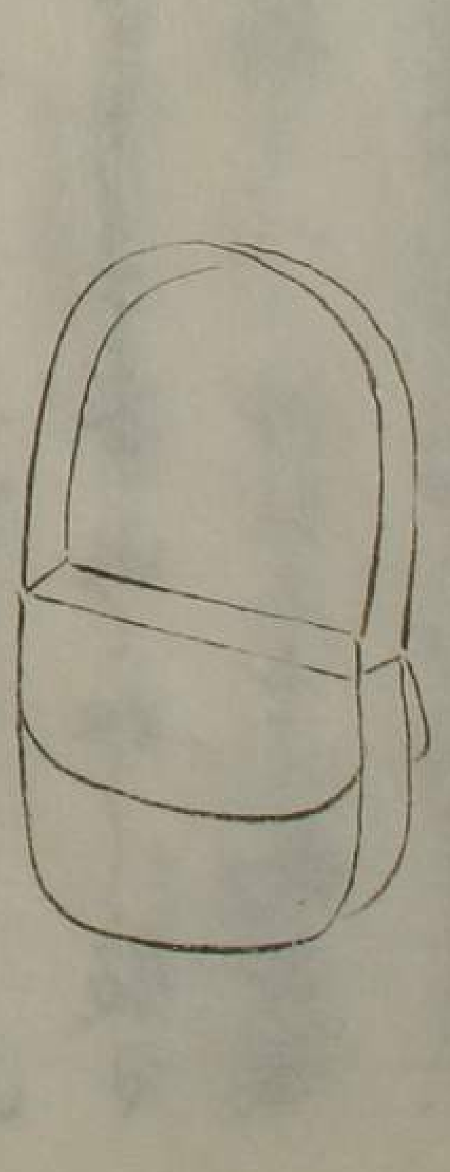
トウカ子

槍之図



斧

玉くすり入



銃ハ鳥の如く三角形の鍔ま拳銃捶形をかり之鑓より柄の
如く三寸の鉄を使ひ鞘を革を用ひ鳥の如く根付をつ

腰にさす刀抜とき左の手にもち用ゆ

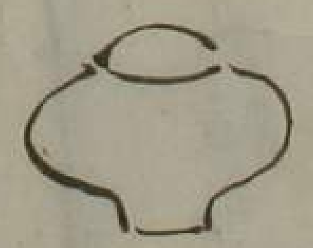
カヤン乃帝王殿へ献上ありタシロといふ所より我らの飯を与へける事を
招まつり卿てたちに人物衣服なとハ筆のつくし只是まての夫
人なと見事その美人也船路中に人卿しと又カヤンより一里た
らま外にカマツヨウカンといふ所にて喪事ありて水主状事あなく
テチンテイといふ人ありカペタン（加必丹）乃次官也其人儀涼く時々呼て
食なとあるもふむ人饗宴旨とす物のあつされハ食せぬ由く
珍らしき肴をとるといふ料理人かのたく
此土の酒宴をこなふ猪口にて八分目ほと半分のこし次へ

娘くる次第にても又ハなかうとのこ婦し次へたくる婚禮のあ
りし處ニ行て親類ニ其親族の様をも尋ねとも由承を
婿と新婦とハきよく揃くる傍ニ正面ニあり客ハ覚しくて
左右ニ並ひ酒肴を正中にあり行酒（シャクトリ）者ハ客の後ニより立
あかりつ諸き飯肴も皆くまて介錯する所酒宴終れハ盥
ニ水を入手拭を添て出せハ客の上にて探しても銀洗ふ
客退けれ見ぬ都しかの御飯肴様すむ

銚子之図

杯之図

盥之図



客
同
同
同
同
同
同

新婦
婿

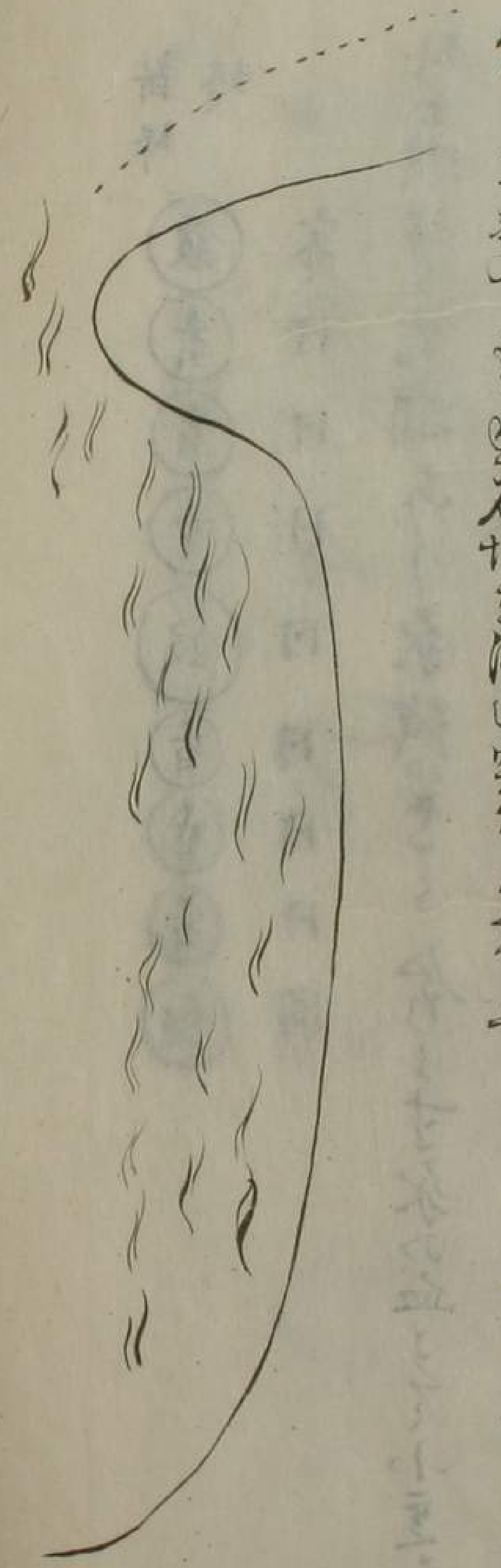
飯 肴 肴 肴 飯 肴 肴 肴 飯

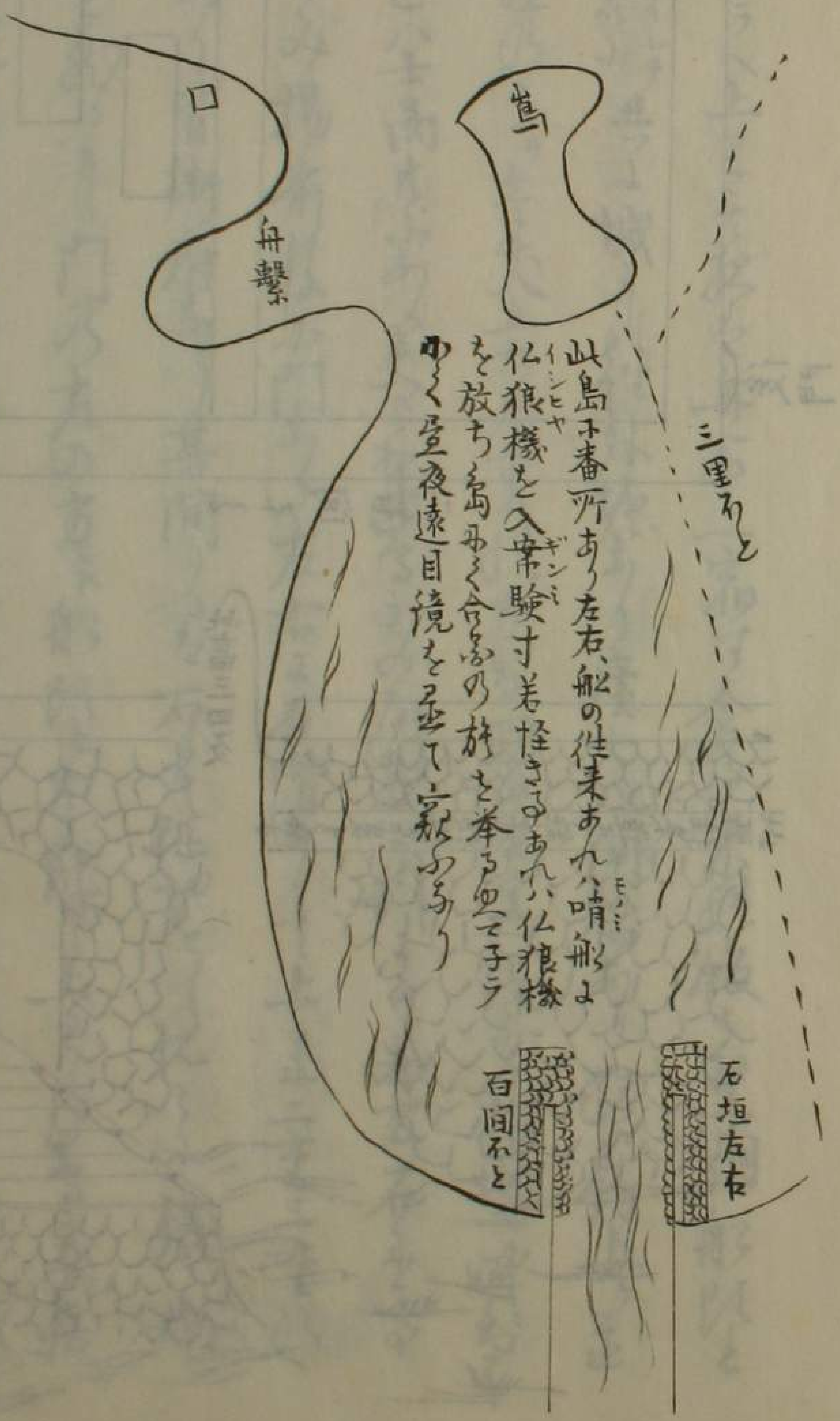
客
同
同
同
同
同
同
同

此土蝦蟹黒鯛あり家ハ貧しく会寸家の皿まで小豆など莫
き家を会寸家ハ穀すら殺ともまた得しぬ此土塩あり一俵の
價ハ銅銭四文なり此方言左のことし
○副日をイシハタ○父をアマ○母をアナ○男をラゝケ
○行といふをバセヤ○飯をイナヘ○蜀黍をテケ○赤をガユ
○あなたといふをラゝケ○米をバライ○銀をバタカ又ヘソと云
○銭をクワウトロ古銀銭てナウ なそはおなし○褌やうの物をハナベシ○
男の陰をラカラウケ○老女をカハツコ○役人をツタル

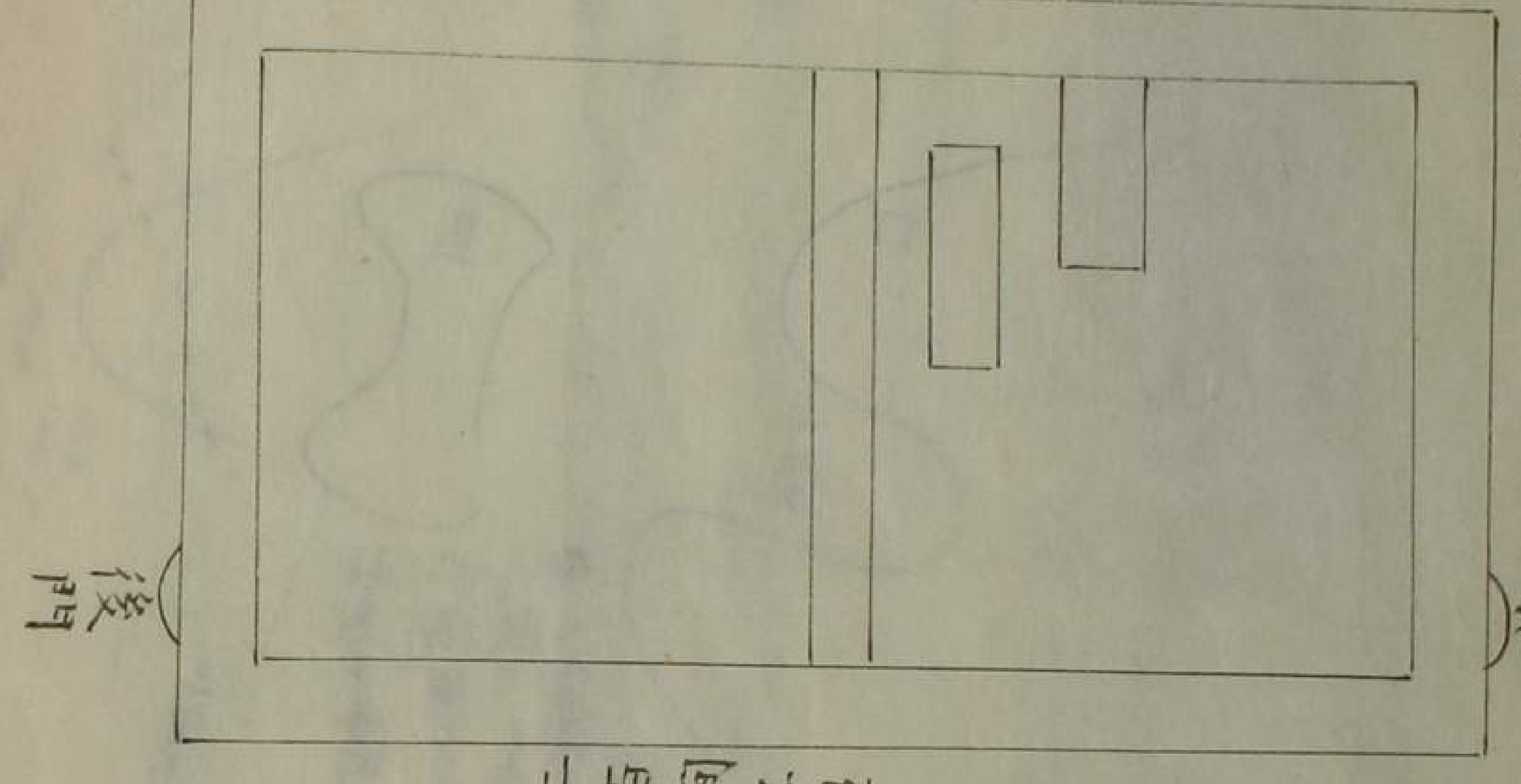
馬尼刺呂宋なり

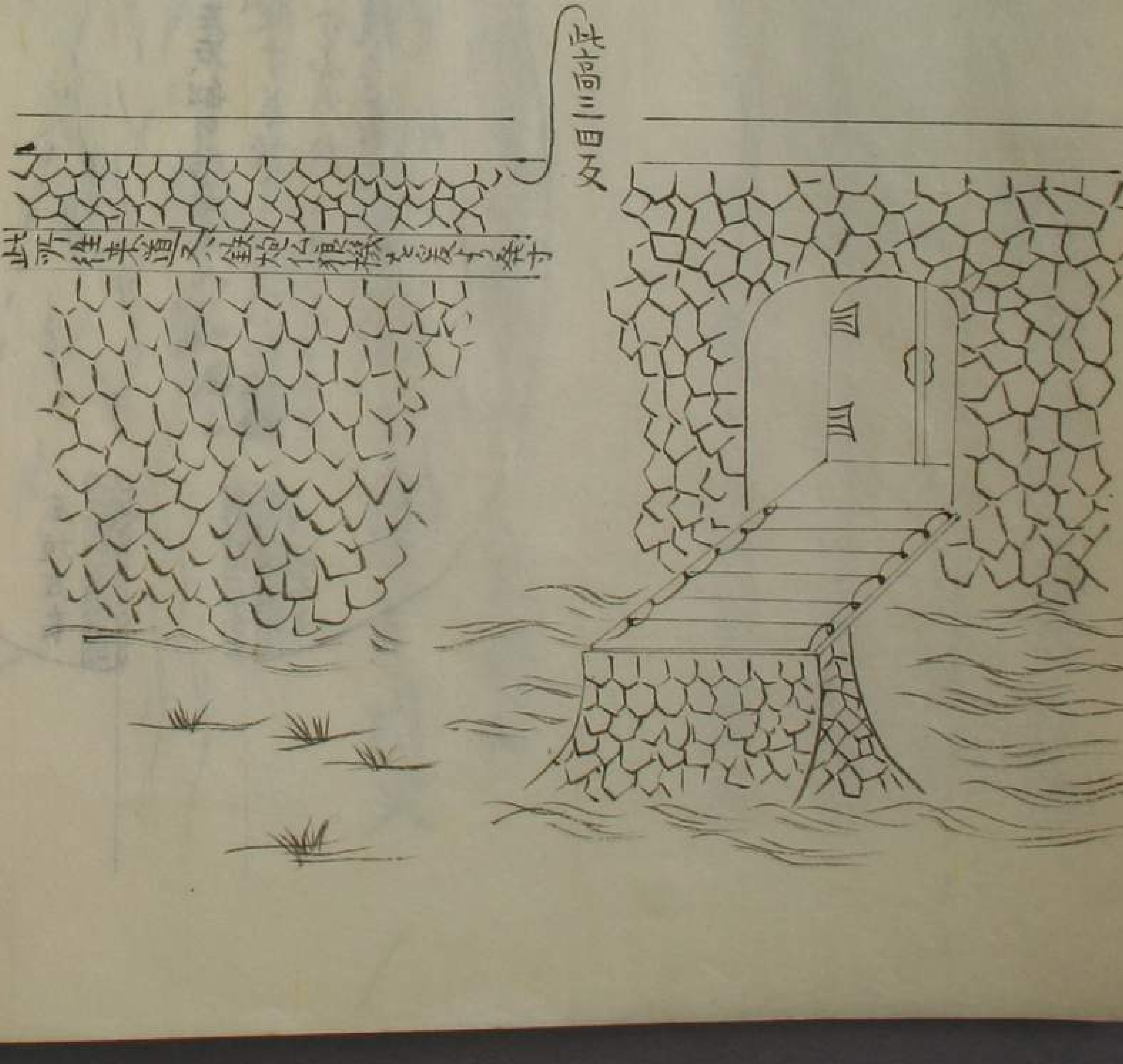
ハタンより東に当れる所乃船にて正月船大工共申合ひ仕
補し為り一日は傭銭二銭宛のよし十二月より漸出帆
して大洋共十三日ほと行陸路あるにしあまてる黒奴男女
いと多く有て職人と云す者へ流しを行よし云ふ事を黒奴
をアツタと以ふ
夫より子ラは湊に入るに川口へ百間ほかり突出しあり
十間ばかりの川口也へ川口より船ともへ流く
余を大船入るるを以て石垣を海迄突出したるなりとそ
石乃許共すき川に入





マ子ラ嶌主ナミキノ圖





マテラヘ上りしに投れ舟宿に一宿す今夜の米飯之翌朝船路と
名をイレテベンと称ふ其よ城あり往外塀あり廣七八間橋あり此ハ釣上ヶ道
石垣乃高サ壹丈五六尺八重此方も図のごとく二段あり棚塀中ほど
と道八十間ほどあり其上櫓あり四面より刳ぬき四方石垣
多くみ揚前にも門あり左右に石階ありて上るに二重三重の
所あり皆衛府あり其間ハ石をもて仕切をして此にも鐵炮
あり鉄砲の門乃左の方に船路を見て上るに皆よく居
間と覚しくて板戸板をめぐらし唐ぬのを張りて硝子の
障子をもて居間の外に士人あり鳥銃を立掛あり舟に
乗る士に何の言ふにも室中に入て海も船路を絡させし人も其外の者

皆〻掃り又左の方にも上りあるに計數府(カンヂヤウ)といふ館あり多く出納する所
にて船に登り學業して文書の所にハ防禦後門の上にあるなり
基所之此所にて官人諸し船に掃り皆〻ハ家にて居所す
三尺ハかり丈余乃食床にて豕牛の調理する台なきよくろくに
かゝる快く食し再ひ前門の左の方楼下板敷の有し所に榻を
かり胡著此所に居る事門上に居る兵を統ぶる隊長(くみがしら)といふ者
人又其下に足軽やう乃者ハ十人斗伍長(こがしら)乃言附き者三人居る
ア皆一日かはりの番之都て雇ひ者の文章又ハ闘争(けんくわ)などに及ひ者
訴訟あるハ皆〻此所にて来り此者を取りハ淀き者ともあり又免さる
もあり　鉄炮乃大なるハ弾の形すて大なるは打出す仕かけ

按海国見聞録日是班(ジヤ)牙者呂宋之祖家也

まよわ隔風を請ふに先島王夫婦其子男女三人あるに數白
く瞳子まで白し夫故この近侍の者純ら足を黒く塗る
男女共数にして三尺ばかりにて役に下る丈人の數ハ九人しても有り
こんなる附もあり衣ハ華人の如く冠を帯び長く
中乃皮にて造り黒漆にてぬり君臣共に用ゆ又庶人
ハ右に記せる席を編みたるにて製し多く銭用ゆ庶人の
衣ハ布にて小き袖にして獨まで不及まんのみあり

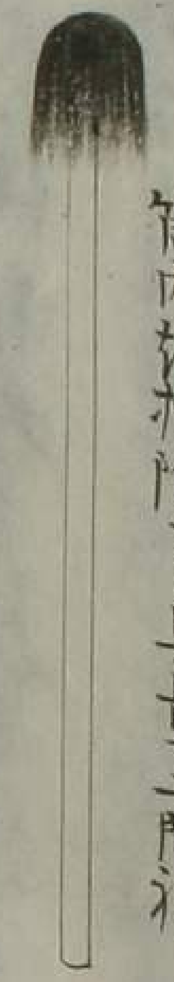
諸士庶人乃家屋皆石にて甚だ高く石にて築き廿二階住居
あり井より水を汲み上げ二階より屋上まで亀なく二階を
板敷とし

七値エ、シウエーキ

城中に七八十間四方に垣あり前に門あり内に三條の街里あり
是に南京廣東福州厦門等より交易に来る商賣の居所
あり後には八所に出る門あり右の出口より携来る品ハ絹木綿
墨筆紙砥石、牛馬皮、鹿皮、藤の直ひろ此商賈の家も二階
住居なり外の街里より木綿など此所に買に来る諸職人も右之
出入も甚なり奴胡麻油抔も製し豆腐も売る（豆腐ハ支那人食すとて只異人もあり用ゆ）此
郎にて皓て暦をうる是にて〇三嶋暦銭二寸月も三十日大小も
なし夫故春夏の気ちもなく正月の飾も寸只かやんより此方
と一月に七日はかり祝ひて後は細理すとぞ寸
城乃後門の前に野菜の市あり見別するハ菜菔（ダイコン）蒜（ニンニク）二物なり

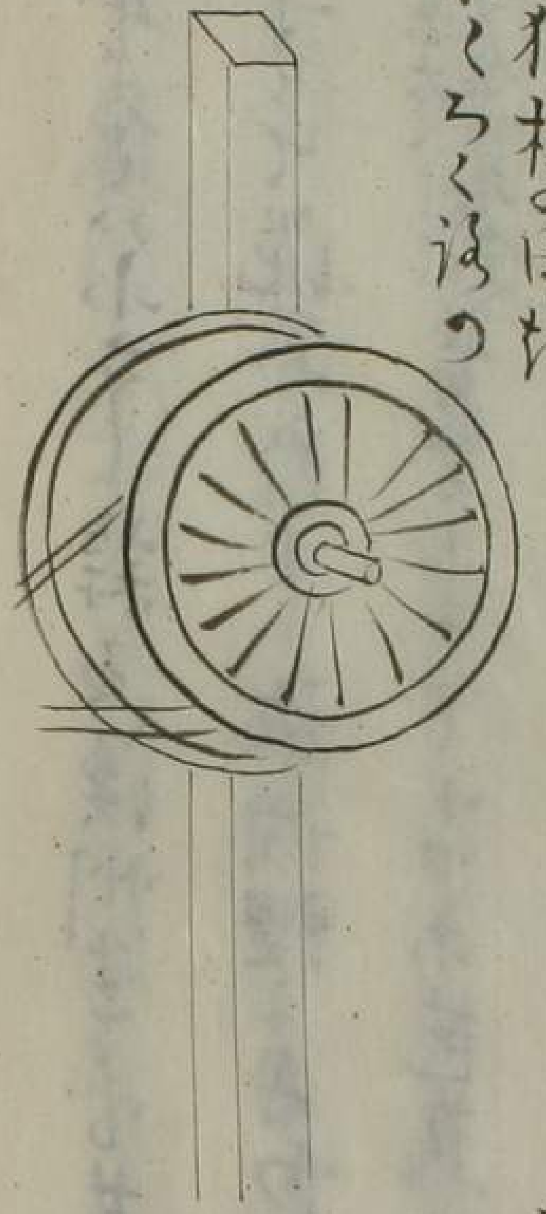
日本より里は小さし絲る渓州にても甚肥けき其用に植ゑる皮を
去りて泥乃ぬくし旅調理に用ゐ西柑龍眼肉（肉水晶のごとく甚甘く）蕃
椒（甚大くして寸余の丸き也）葱、カホチヤ、リツホ芭蕉乃実あり芭蕉乃高さ
一弐丈程あり実なれハ本根抜きり倒すなり（実を常に食ふと）
城中に佛狼機鳥銃を造る郎あり四方に垣ありて平さ
右廊下に左右職る寸鍛冶なりる鏡なとを見あけ磨き
なとするあり其上文飾（しあげ）なとすることハ外やなし両面の處みて
頭くろにて佛狼機乃肉をとらかく器のごとし
佛狼機器のかたち車に乗せ左右とも鉄乃杖をもつて器のごとき
楔（くさび）をかひ筒の頭の後ろ定むまわれり見る心のごとき事なし

嵩ヲ志思し又筒内を掃除するには一丈弐尺余乃棒の先
へ苧を以て掃除すれば玉ハ多く府庫ニ貯へ置又床外
ニも山乃ごとく積置ける鉄乃粉を去と命しくすべし
其丸ニ用ゆる火縄ハ木綿にて作り付火を移す

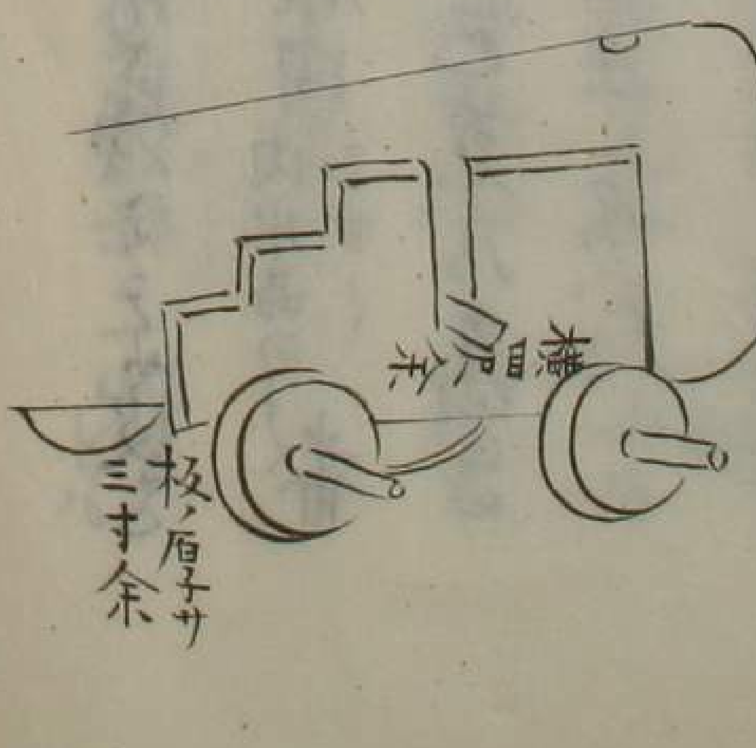


筒内を掃除する具長サ二間程

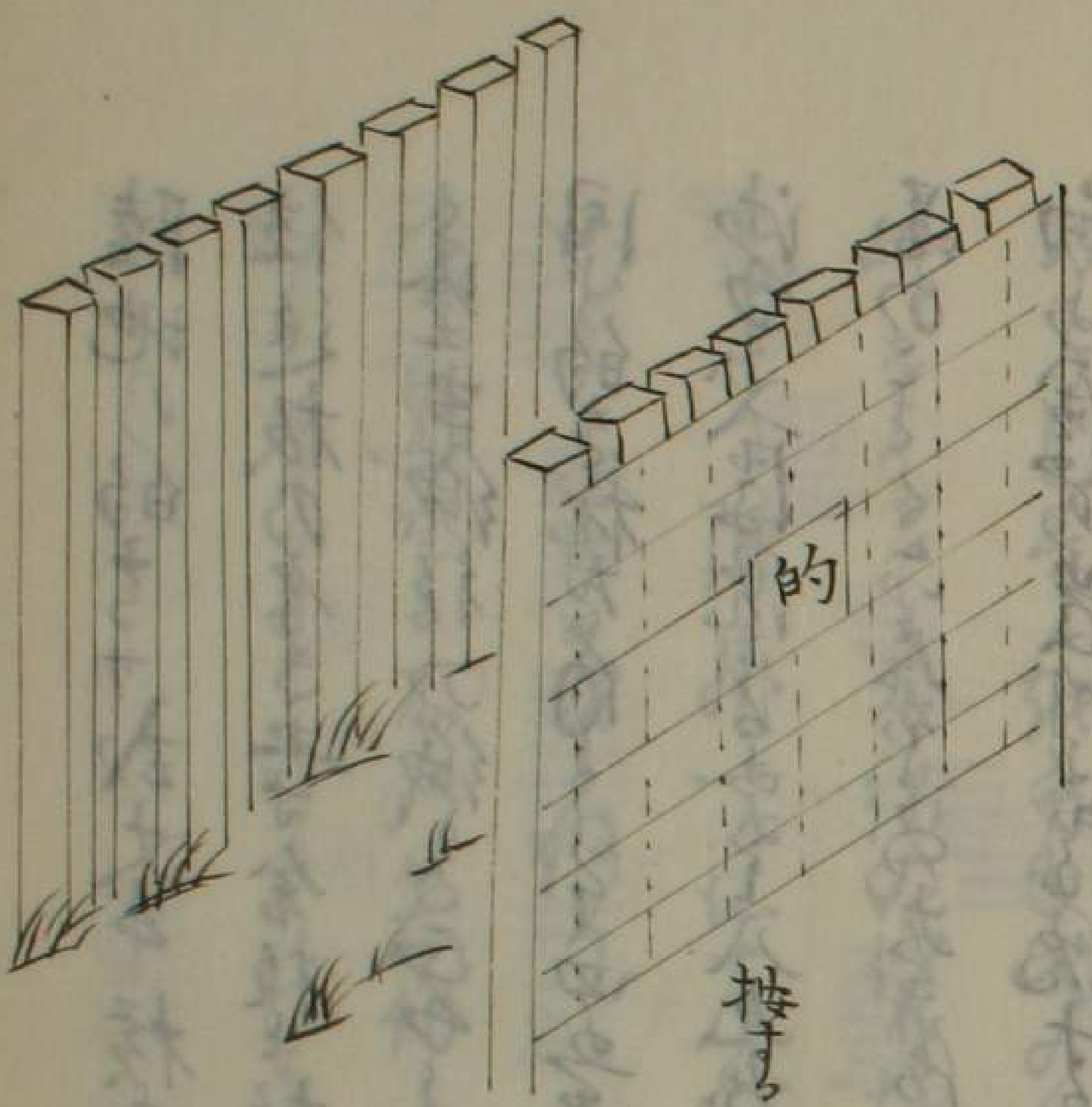
佛狼機の体を見かくろく謁の図

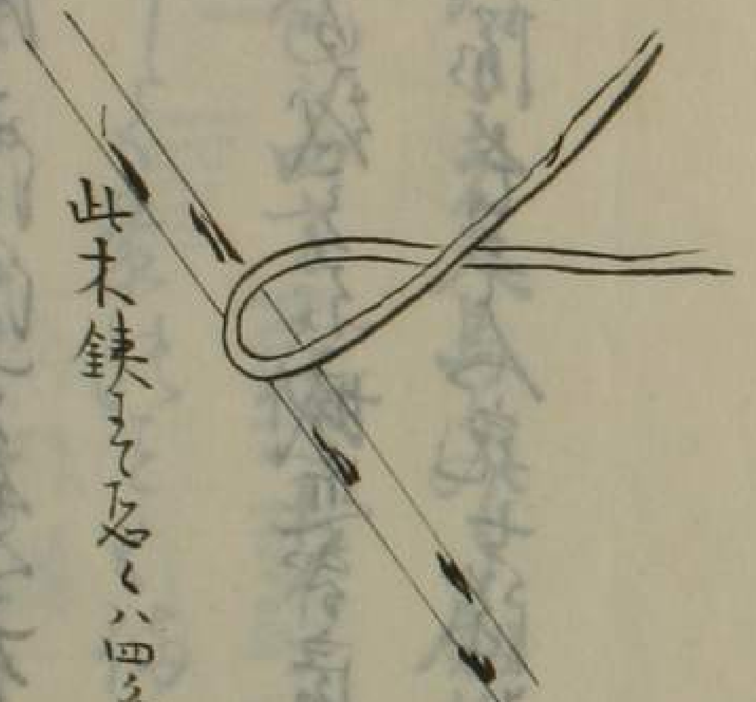


佛狼機之図



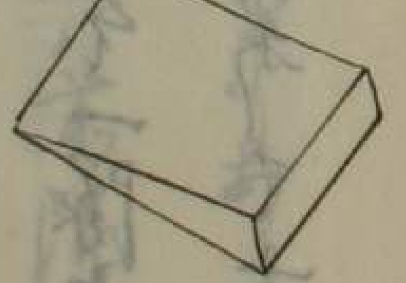
陸地的之図

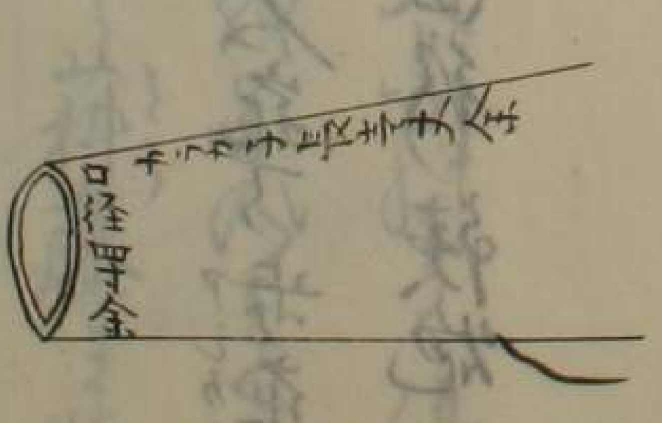




此木鉄にて包くハ四角なる

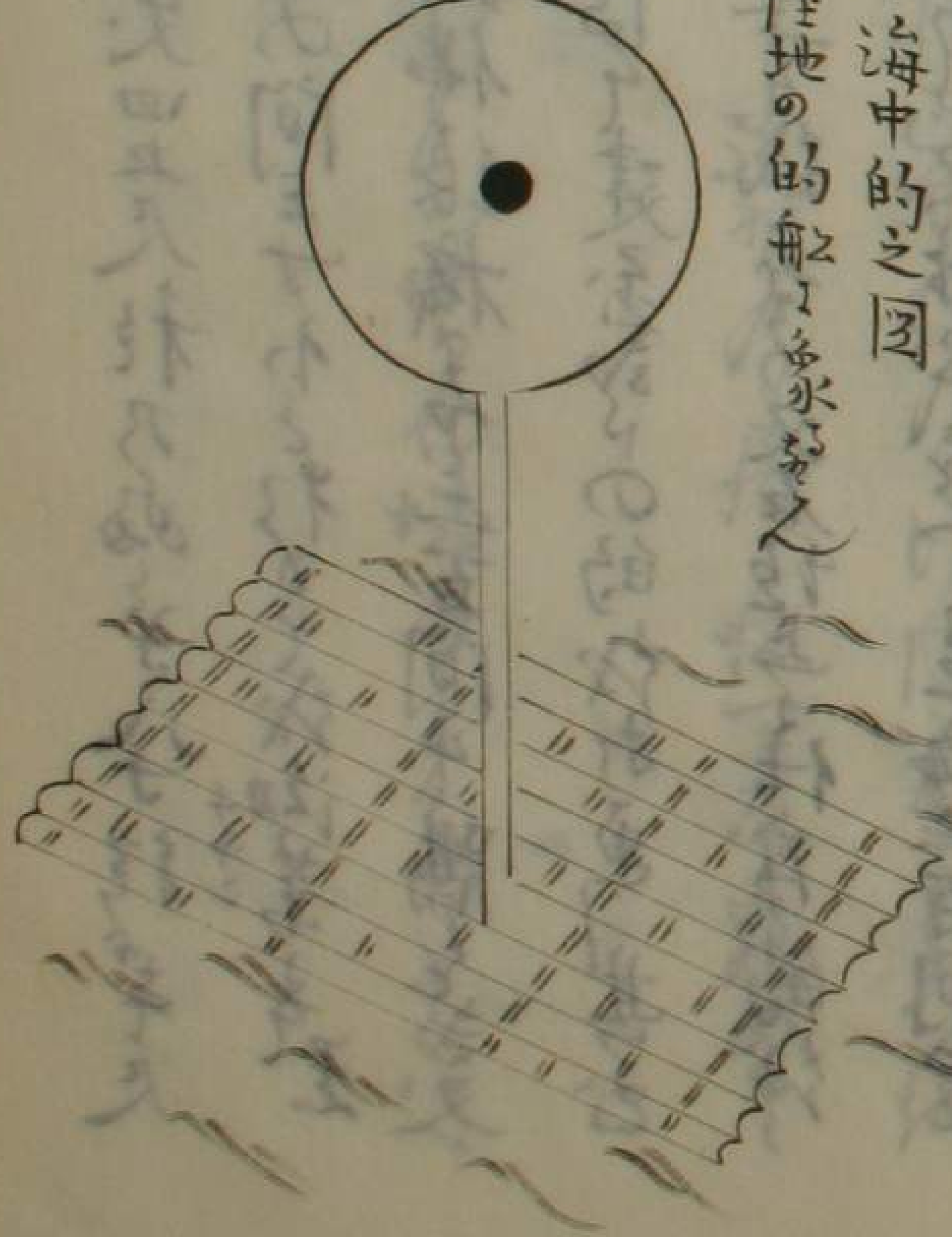
楔之図





楔するに陸地の的船ニ象る之

海中的之図



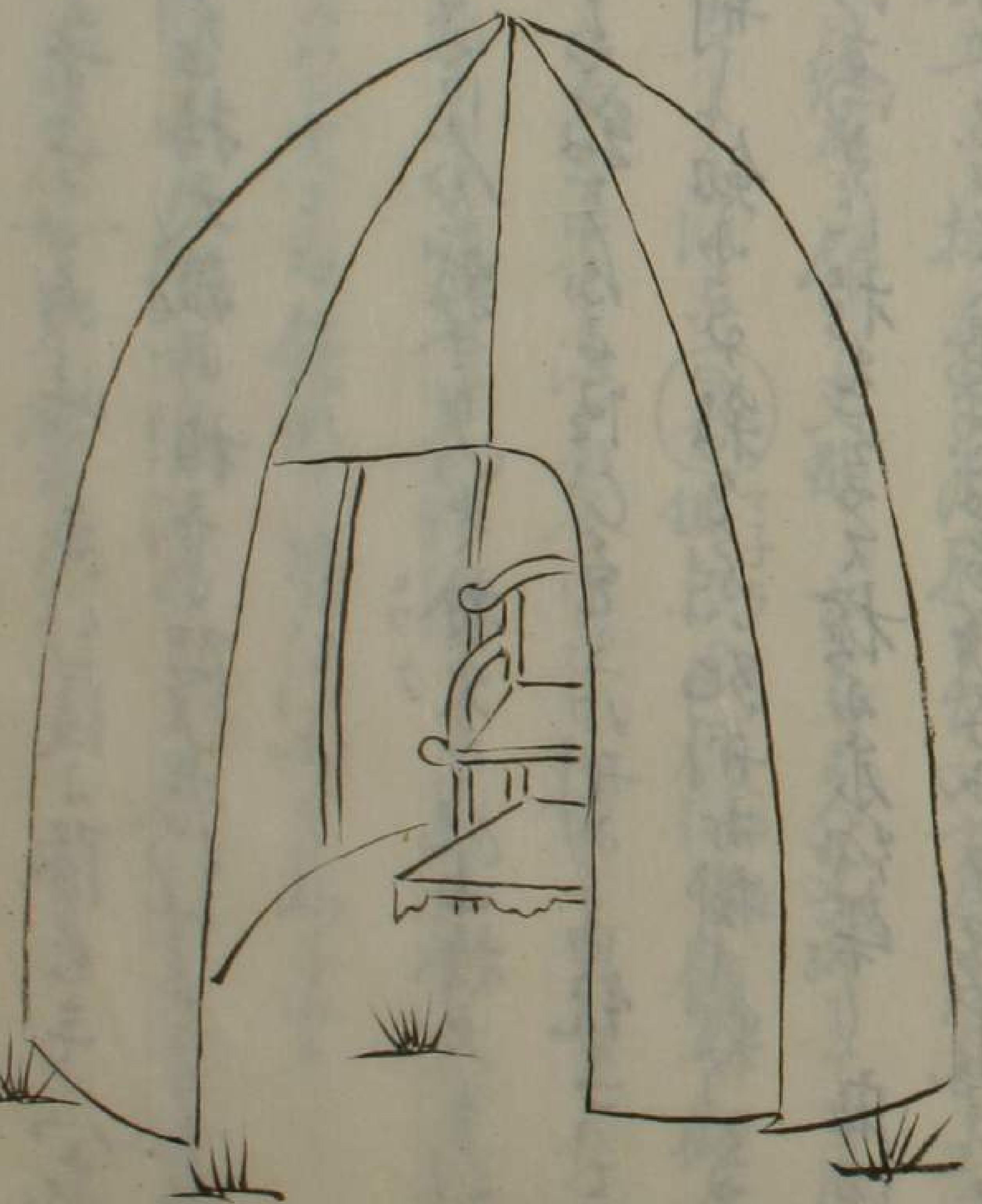
陸地乃的ハ高サ弐丈斗横ハ丈四五尺程乃ぬのに八分程ハ三尺
位追板の厚さ五寸余柱と柱との間三寸ばかり透かして銭湖(チャン)笹にて黒
く塗りて銭糸の紙を正中に張佛狼機にて二百間斗隔てゝ又
同じ的を机左にて四五町隔て建置きその的を打事甚妙
海中に入りて流れある的を八九尺追する銭をまて又石垣上に仕かけ的銭
器のごとく六尺斗との大きさに浮かべて之を打たんと之海上百間程を
向ふへ流し発つて浮流する物へ大きな当て一月より六七度も
発つて有り

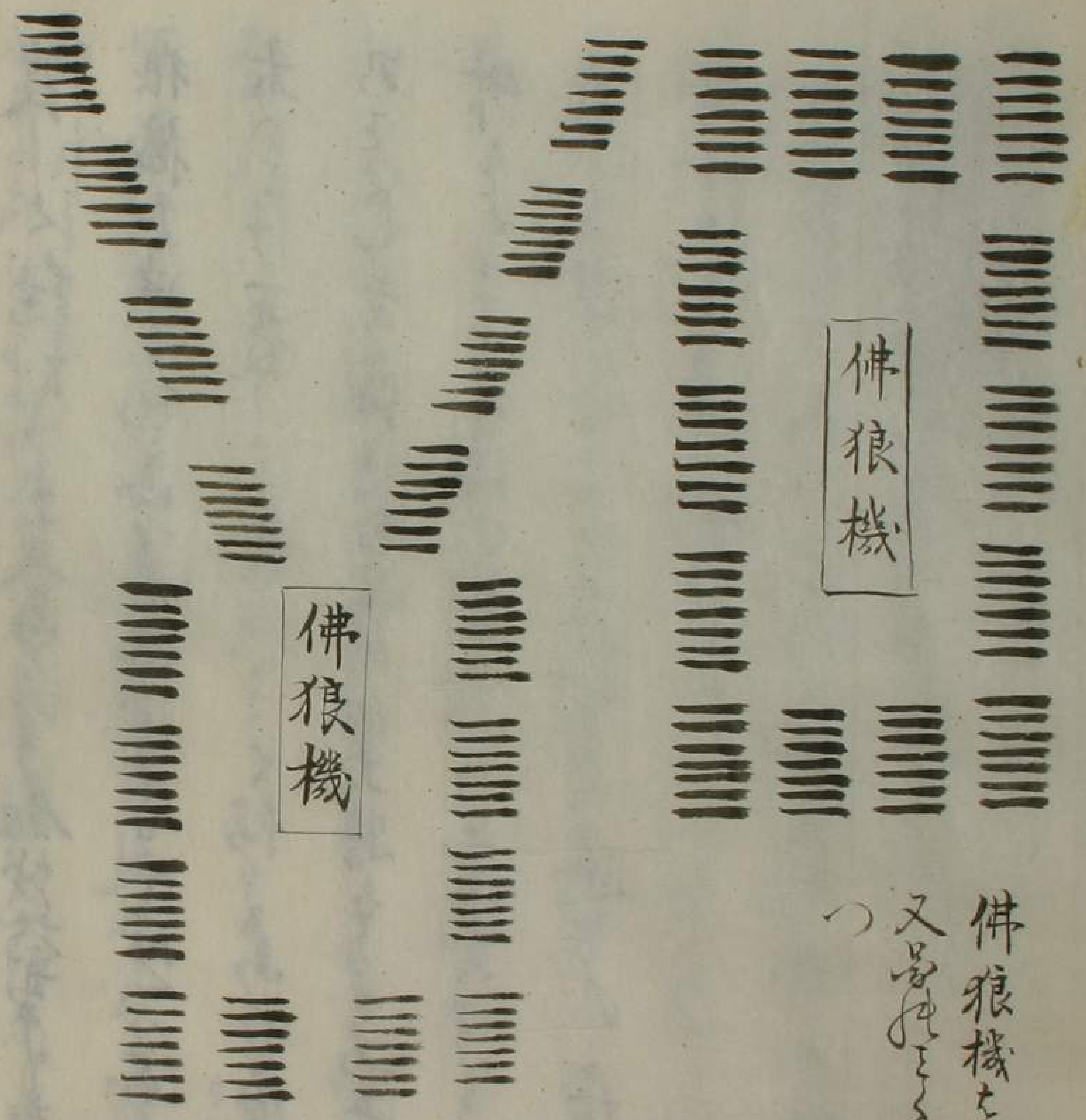
軍事銭兎する銭ごとに城近き座敷にて一隊七人宛乃歩卒(アレカル)
赤き引うち白き着ものをと着草の衣ぬをとく隊ちに人宛七隊を二行ありて十四行鉄炮一

発しく保引より丈又馬にのり銃を打事もあり又子供ども佛
狼機を中に包み四方に備へホイコ堂を以へ八才隊銃器乃ごとく左
右にうけ一発しく素就とく備りてあり魔(さい)羅し蒋藤(とう)にて鞍
乃ごとくしたる銃用ひたるの時大將をまるまんの所へ参り依る器械ぬく
件たとへばて本給の銃薬打うけ正中残るうけ内にきまりろく銃
並さり陳屋一ヶ所左右にし迫羽の居る所一ヶ所宛ありて
而小高き所にあり
又よ要する所乃器械をして其中ゆゑや埒中にあつまつく八へ
あり掛まゐるし引しの都の

大將居所之図

是日本乃楽灑堂あり





佛狼機を宮の如く包ミ備へ
又鳥銃を以帰隊を守らせて大あつ

一

邏所乃交代なところハ七人みな五人一隊として七組ニ而組ハ
又十組ニ行一行ニ並ず守　一如此ニ並ひ後ニ隊長壱人宛行
歩卒ハ皆銃子を持太鼓乃柏子ニ随ひ歩行するニ足並柏
子ヲ違ハず

此ち乃刑罰殊さくに人を殺すもの也　槍火斗ニ掛由槍火ニ火刑ニ
行ひ人を殺せるを殺なみ随ひ重き乃刑ある由銃子ニて殺
せるハ銃子ニて刑し劔ニ而殺すニハ死刑ニ擲し殺してある
左右ニ竹丈余乃高さに柱を立て横ニ木を架し麻縄にて
罪人の頭を括り大縄をはさみ横子にて　横木に括り
のぼせ投下し足ニ壓鎮をはさみ殺す

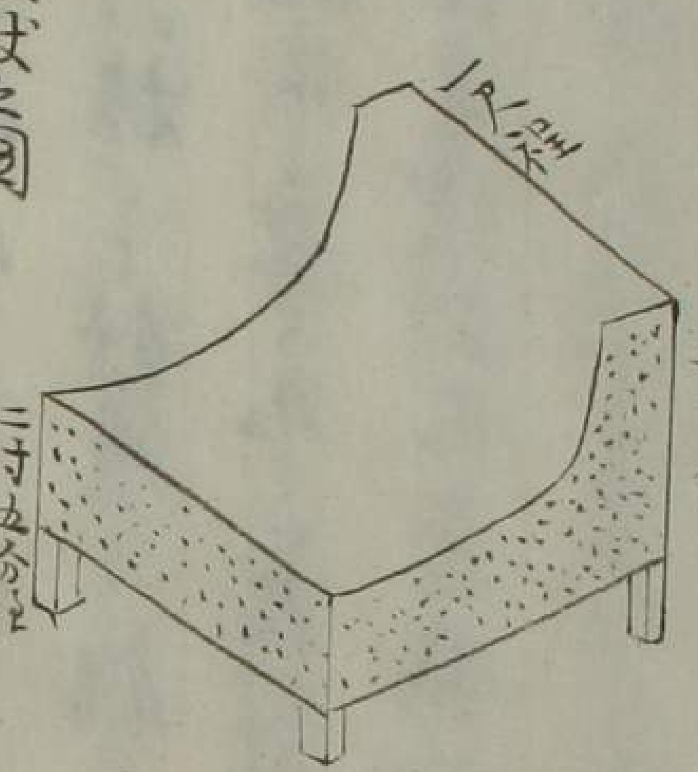
銀ニ三等あり大ハイフ中セカハ小セカワロとて皆イスハンヤより
きたるニ金下ニ銀五ツニ換ふニ金の形日本の古今銭ニ似て薄く
して如し文字絵あり銀ハ支那に交易ニ入支那まて用ゆ
銀ニ大ニのるハてマ子ラより渡る マ子ラ銀之影 支那銀乃影 銭ニ銅銭
孔ありし広東まて六文三歩ニ渡ゆ金ハ至て稀ニてこゝ事少き
ら諸を用ゐ様ニ如く呼入銀銭をかへ取る数多様
男子らてマ子ライスハンヤニて鍾成く皆清法ニ真似る也
織物の類なる日本乃縞木綿のぬし三尋あまりハ弐人乃単衣
ゝふに文様つけし更紗を多く製す
土地田間ニ溝洫なく雨後待カヽヤン乃如く牛にて耕す

綿羊あり毛甚長し春きりとれハ秋又なかのひ春秋弐
度苅取て他邦ニ交易す大なる毛おりの織物皆綿羊なりとし
飲食ハ胡蕃の食事なりとて偽す四足なるもの大余の食膳とせす
夫婦とも圓椅にかけ銀盤磁盤に肉類多く盛り前に置すへて三
食具（バタンの形ちなる匙の箸七あり）なりたる銀の小淺碟（コザラ）にとり分け食す（一度小さき皿にとりし八再ひ用ひぬなり）
幾ツもなく出す都て肉食にみな胡椒をつけ食す（胡椒ハ此土ニ産せす又婦人なとハ食はすもの砂糖一）
塊を入て喫す茶の食膳にも出るなり土人狗猫なとも食せす豚鶏なとを貴ぶ狗ハ大にして
尾短く頭長し又小形なるもあり白き犬のごときもありカステル
と云獣あり角あつて鹿の如く蹄も連ぬ野生にて康ならぬ太なるを
ある食ふ味甘しといふ

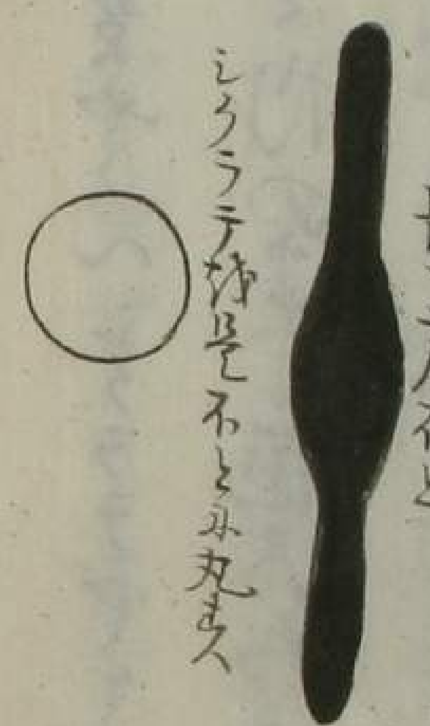
何乃實やらん（ミクラテ）かて極ぬ實のかく 足程にて上皮
甚硬く内の実も極のごとく形ち其上皮を去て未く中程の仁白きの
上皮を取て捨上皮を去りこぼせん白き乎らる石礎（うす）乃上にてよ
鉄乃棒にて粉に磨し餅のごとくなる砂糖多く入三四遍ハ
石臼にて磨く丸く形ち程にして陰乾にし菓子を蔵に
先好菓を別乃葉餅へ茶碗へ一ツ程へ（一度のむ匙ニ程なと入）
茶の入り上ニ湯少しミクラテ入匙具とを餅中ニ入にて搔く交
小和し飲む甚甘しと云人の命と用て早械のかはりハ價高
く飲事なる時都而茶なかり飲事凡し必茶碗の茶ニ
白砂糖一匕ほと入て食後菓子なと出す此土

に産する砂糖ハ志ろくて味よく白砂糖ハ清国より来
るよし此も食子にするなり

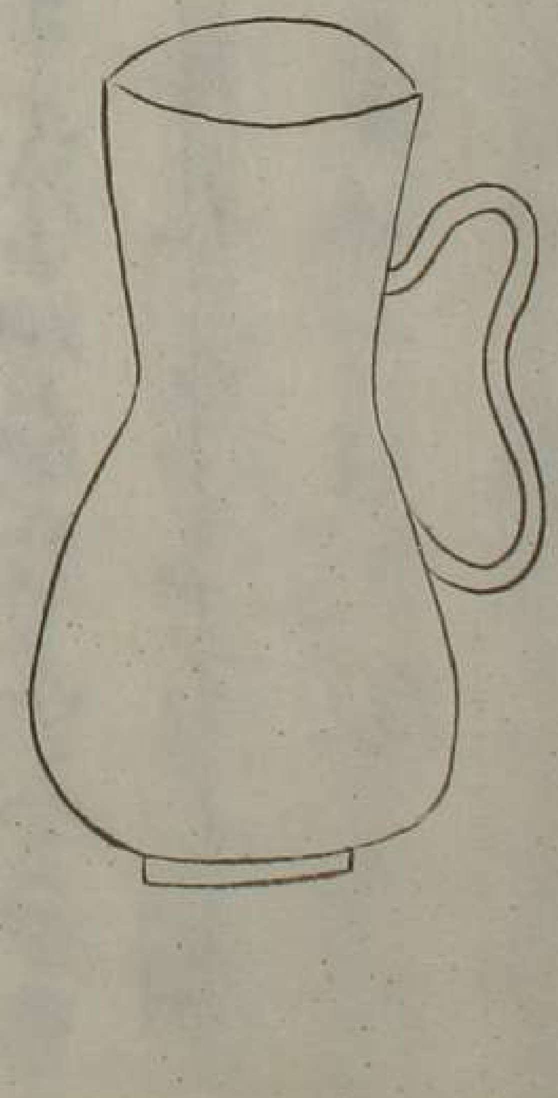
石碾之図

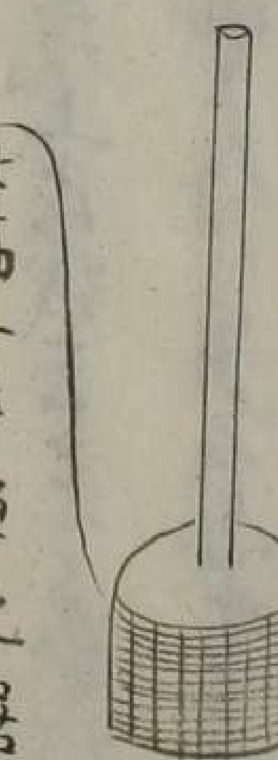


鉄杖之図



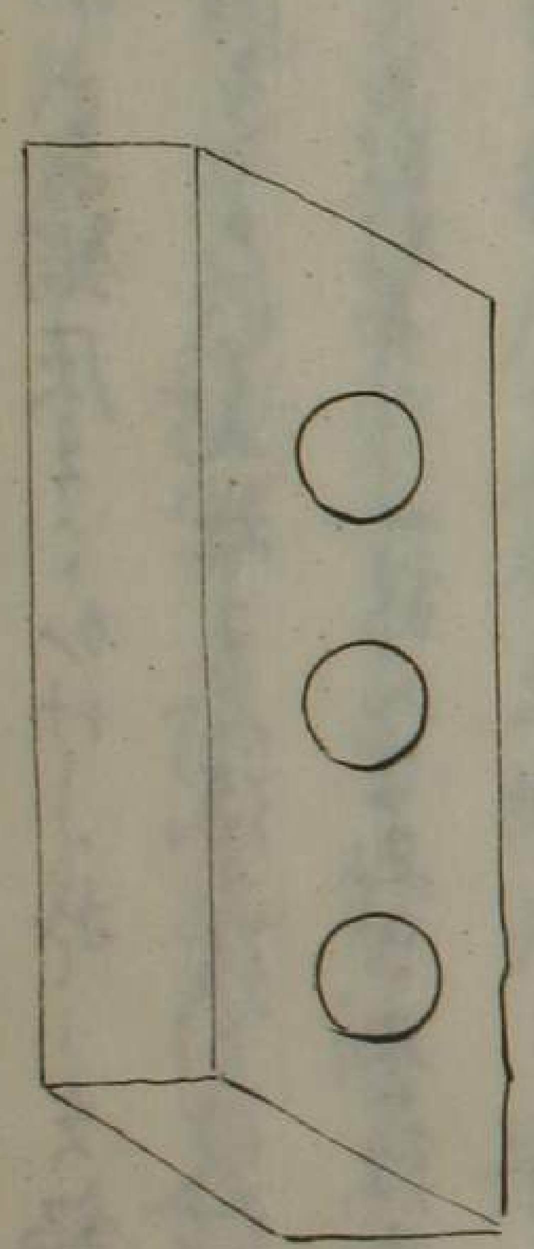
薬罐之図





按欧羅巴地方皆如
此トキケリ其土ヨリ
来リ居ハ全ヘカラ子ルヘシ

厠ハ家乃おくかしこにあるく板敷に穴を明け丈ケ椽もとより
板の上に腰かけて大小便をするなり必ず壺瓶を置ありシユビン虎子をもち小便
乃あふるゝ者は床の水かめ水三斗ほかりも入る物にての水にて洗ひ其水にあへ
糞汁も入れて是を城外乃街里にて厠乃あとに入れて大のあとへ
おしあけ洗ふもよろしのめへ手を入れ飲する椰子乃机杪
ふそのゝ又捨にかすをすかめへ入るゝなり



厠之図

脂乃浮きたる小鍋灰にかけられ持ち来る鍋ハ小銅鍋なり
料理茶屋なとにて美味を盛り残りの汁を又鍋の中に入
て煮焼きしたるに似たり 薪ハ見なき木蘇木又ハ海岸なとに
生ひしける木の枝多く
此土地人多く集り一月に四度乃出当之の郎に茶碗のまゝ
かなみなる椰子なとの殻持て到る小銭なとを與へ而して街里なと
をまわり乞丐ハ残物なとの銭あるに常にハ寺に来て食物
あるなり
銅銭四銭乃老嬢(ショロフ)より銀下までの布娘あり娼家としてある
なるへし

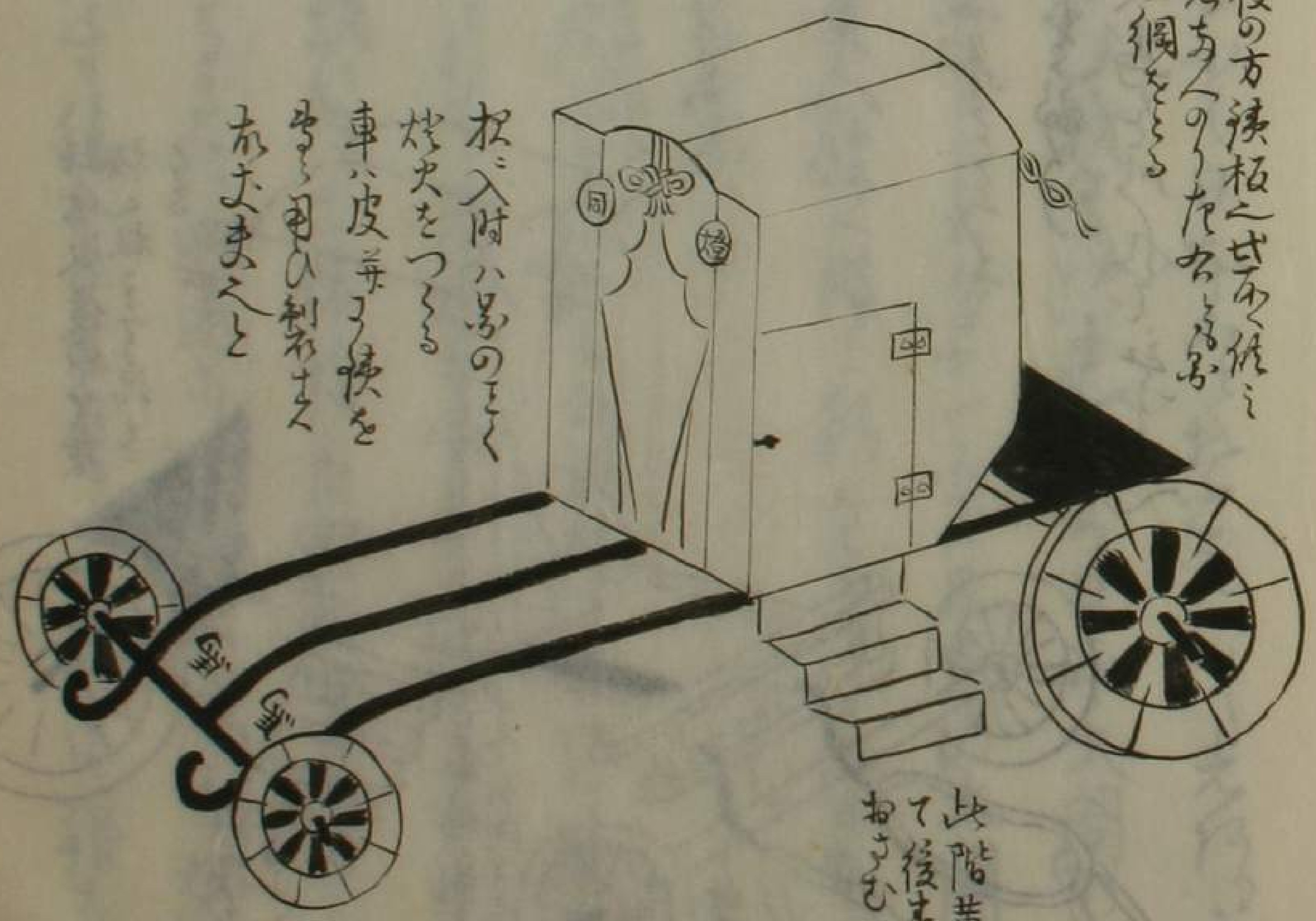
薬種奥し日本の事なし 皆外治之腹痛なとに用ゆるは
水を浴せすゝめし楊梅瘡を療治し多く銭をとりて陰
茎を刺絡し毎月常に手足の脉を辟内なとの浮絡を刺す
又酌焼酎へ鶏卵を和して治く
城外乃街里に諸商人あり薬舗素麺餺飩(ホウトン)菓子酒薪
木綿皮舗廃鉄(ふるかね)舗工匠磁器(此所にて磁器なとを作ることなし) 籃師轆轤
師豆腐紙打桶屋茶舗又蝋燭を製する職人なと蜜蝋
甘蔗細かにして牛に負ひの上に引き出水を酒として次日に取りて煮出す数日
其後ハ白蝋となりて凡器に水に浸し行き入細なく作る日
与ゆ如き法のなし

蝋燭を制するには先木綿の糸を 是程との大きさに
くゝり上り木枕を以て糸を幾すも かくのごとく
此を蝋を鍋に入て鍋の上にて幾通りもかけぬく
上細く下太くなりたる時日にて乾かし板にて
本朝人水を酒に洗ひて銭出し売る長さ四五尺のものあり
糸心も入れ焼まゝ日本とは違ひ品よく出来し焼火風にも
焼のれてもきえ不す

上方にて商売の外に此ちの商売あり酒煙草菓果魚牛
豕乃きものボアあり皆斤量にて斗を売るもの買者も市
中く志拜みに淘籮（ざる）を携へ見出より法国まて皆錦にて
城外租の入川の辺に六角郎あり前後に門番あり（門番ハてナラ）
（ようき）なる歩卒の外は無入のもの銭取扱ふにカベタン五六人あり上に品に
国々の商売は去年夏より郎と法に此郎の二階に住居し
五年七年位にて交代し夏人此ちにて妻妾を持すもあれ
しも帰国の時に連れ帰らす
魚舗にて見分けるたる所は、いかなるもあらじ、此なるは
様々の飛魚ちへはせ ちへはきの形鯛のよしけあり皮は（浅きて）
（本邦の似すもち出し見下して又薄色あり）

蘇朱紮檀里等ホウホシカ、ヤンの邑より出されきたる夏
船又交易してせしく之
傭吏あり皆兼帯なり傭賃銅銭四銭
其是午飯をきく　吏婦とも果にとも車ニ乗りて街里を往来
其ゆ那其一時斗も往来し帰る又其道に家宰の家往皆
くして帰るもあり其邑の邸へ（黄昏より）執事まで起居致
うかゞふ時ハ之車にのりきたる其幾人も来る酒宴のあるとき
なとは琵琶なとも聞こえくる
此土の邑ハ下官人富商にも車にのる邑ハ多し馬一疋にて牽
駟馬二馬あるを制する邑ハなし

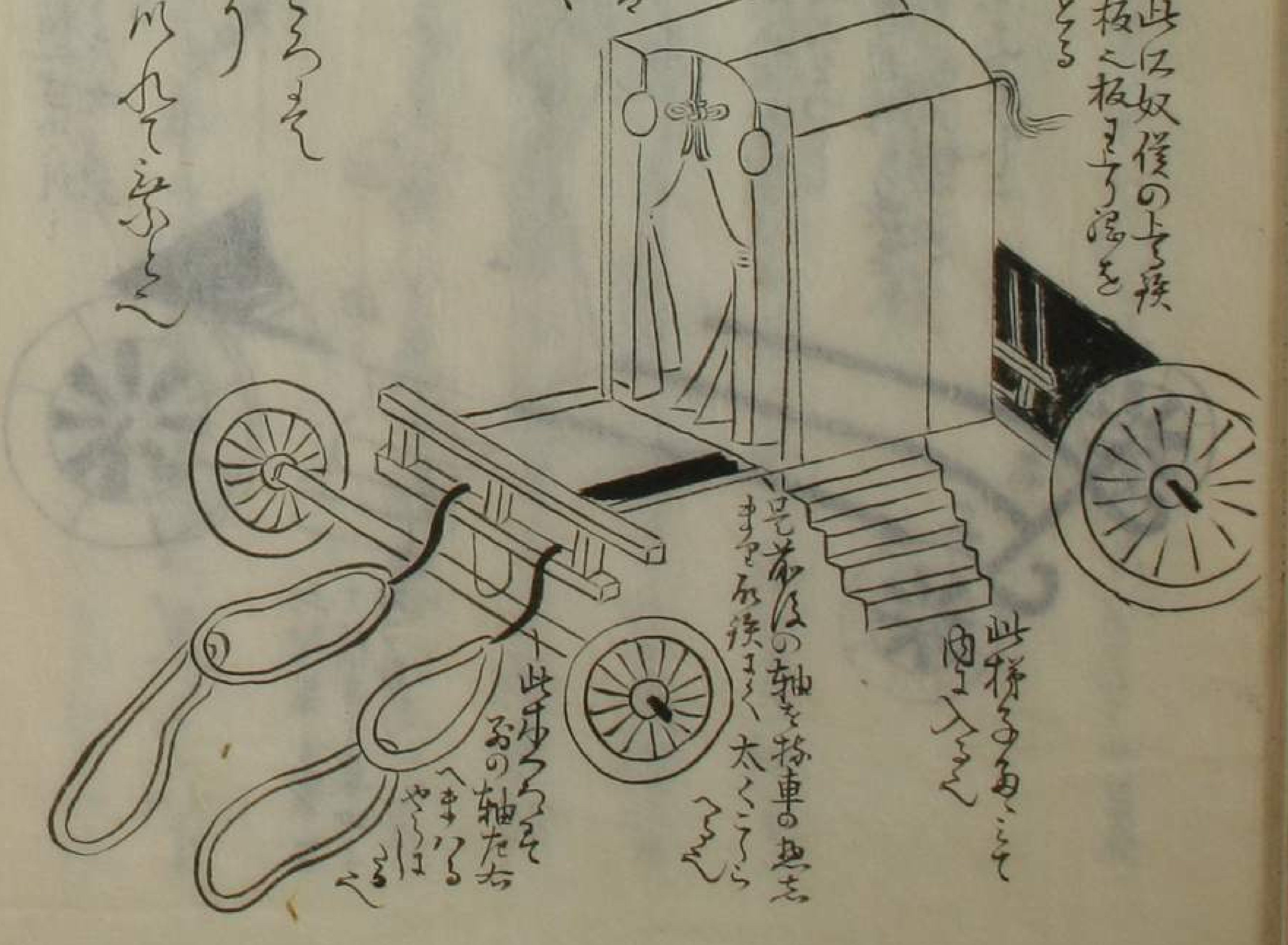
馬ハ駟馬二馬ある
用る時ハ手綱子乃
やとに後ハ後ニ坐ス



凡車中二人のる也
車後の鉄板ニ奴僕乗て
梯子の出入を守る也八
四馬なれハ二人皆馬毎ニ
乗又一馬にて出るもあり其
時ハ車の上ニ乗て自ら運行
そうて出く

四方の上ハ板にて内ハ
哆羅絨にて張きる也
あり

此馬は主人を梯子の中にてうしろ
乎のまゝ家体を立出る也
車前乃縄の中へ馬を入れて乗る也



カヘタンやうのもの方にて日本より来たりし者の子孫なる由色
ら料理をまても我か家先祖ハ日本太閤の宿志なる
し者也其子孫なりと云カヤ二世て日本の太閤を神と
今ハ死せりやら問ふ夏人彼人に行き書にて日本の事を
尋ねや書なとさせてみしと云し
てチラ城下より一里程行ホテラヨと云所あり其所ニ闘鶏會（ホトヽキあハせ）あ
り看棚（サシキ）二十間四面なるし周廻に仕切て垣をして中ニ茗舗（チヤミセ）を
榜貨（フタセン）するセカハ銀一錢取り其儀場に四間四方なるにて其
地なる四尺中の高さに四周をかこみ各鶏を推入れ行き
勝負をまたし賭（カケ）をする者勝負によりて銀をとると見

物ある者も賭をして互に勝負を競る也又紀皆ニ弱き者共も
あれて距離切て張出しㄴ如のごとく縛付る也又蹴鞠する時も
必ずと乾枯となりて東西に相立居て胡乱の時より申時まで架
止む一月四度かりつぎ名数を以て勝負をなす　田舎抔
にても角紙ます

巳正月万人館より二三町外華師の戸内に徘徊して居る架
し小涜より架跡を志ものの新あり顧ゐまれ八歩卒之仔細
を言ふものなく又眉間を打血を流し出し高らかに居りしのけある風
兵補の如きことの前の縫目を後目の證とせんと掴み離して
連八歩卒又剣を抜んと志てる夏館の門中に迅速に去る文

仕長より甚しく中にも八隊長外に出る者も血を濯ぐ其他
患て待受と答ふ敵燕二娘を呼戒め委く詞通せぬゆへ
歩卒に仍て戒を打擲する状にかゝりしに通言令を隊長
帰りて其答に出るを委しく申せしに八歩卒が案験し縛し
外に出し而して後も歩卒が八人ばかりし
営主の居室近き所に候鐘（トケイ）あり形状のぬくして

銅舌あり又舌を以て打鳴らす響も日本に用ゆる自鳴鐘に
打つ所なりに昼夜打鳴る時を告ぐる昼夜二十四時之○
アラレヲ　ヨナ○アラシカウシ○アラシテレン○アラシクワット○アラシ
センコ○アラシサイシ○アラシヲ、チヨ○アラシメイヘエ○アラシニアエ

イレ○アラレランサイ
此ちの方言○一ハヨンナ○二ハトウレ○三ハテレレ○四ハクワ
ツト○五ハサンコ○六ハサイレ○七ハサイテノ○八ハヨクチヨ○
九ハスイヘヱ○十ハテヱイレ○百をサント○千ハヨレメリ○一日ハ
ヨンテヤ○二日ハトウレテヤ　以下皆是ニ准し同し　テヤハ日をいふなり　○一年ハヨヤン
ニヨ○二年ハトウレアンニヨ　以下皆是ニ准す　アンニヨは年と云ふなり　○支干やうの詞ハ
あれとも志れかたし一二覚へ書留る○ノリテ○ノリテアイ
レテ○ヲアイレテ○アイレテ○ソウル○ソリクアイレテ○下痢るハト
ロメ○船よ上るハビアセ○夏風をコサナ○風をベント○月をロナ
○日ハノヲル○たばこハタハコ○煙草をコハコ○よんといふるハ

ボイノ○足よふと云事をミラ○書籍をレイフロ○筆ハホロテ○
墨ハテンタ○書くるをハイレキソベ○女の小児ハヱヘハ○男の小児
ハヱイホ○奴僕をムチヤチウ○飯をモリスケタ○人の年歳を
とふ時をウレテレクワントアンニヨ○今年を云ふ時ハアゴラ○
食する者コメタ○大ハランテ○小ハツケト又ヘケ子イも○鉄炮
たとラサリヨ○佛狼機をヱニヨン○厚といふるハヨレハカ○なまく
といふるハタレモウスナ○川ハレヨ○海ハタウ○石ハイヨ
○男ハヲンフレ○女ハモヘリ○夫人ハセニヨラン○島をハセニヨルコヘ
ナトル○木ハレニヤ○火ハホイコ○米ハアロレ○高貴の人ハセニ
ヨル○人ハニヨル○家ハカサ○大船ハハルカウ○舟艘橹まあ

猪脂を「ミンテイカ」ト云ハ波尔杜瓦尔言ナリ「イスパニア」モ同シカルヘシ

ほこのをてり子ロ○襟をカリソン○牛をハツカ○炭をカロク
○茶盆をタサ○金のあみをコセリヤウ○小ばこをフラト○蓮
をコチヤラ○匙をシヤリ○砂糖をカレラカル○煮たるもの々問
ふヤツコセトウ○又煮たる物をふヲコセニヨル○すゞりを向
ふテニモチヨ○よふなひとゝ云をノアイセトウ○暫く待よ々いふを
ヲンホコイレホイラ○待てや待ふと言をセニヨル○はらハ行ふと
云をマムシセニヨル○明るをてニヤナ○明後日をトラてニヤナ○
明明後日をヲトロてニヤナ○来れと云をヘ子○怒て行と云を
ホエラ○[illegible]をイヨノサヘ○是へしと云をサセニヨルイヨシヘヤ
○鶏をカレナ○たまごをコエホシ○燈油をアセテ○豕の油を

按ニ「イキリス」ハ島なり「フランス」ハ国地世間チガヒ成ベシ「ヲロハ」ハ欧羅巴ナルヘシ「イスパニア」モ欧羅巴ノ属洲トイフヲキヽ違ヒタルヘシ

モンテイカ○蝋燭をカンテラ
イスハンヤへゆくにハ先鍼盤を北へさして行其後を何方へさして
行のきかす海上にハ月日とほしをのみ行ものにて向ハ風次第
速きハ到るとかくきよく海上ハ潮の流れゆへに随ふ也三月計
かゝく帰るよしイスハンヤ乃近きにイギリスフランセツスにて二かうと
イスハンヤと馬足を立てるもイスハンヤは最上の大国乃由也
ハンヤをヲロハやうもんのふへし
右之通へ日本へ海をきゆ紀へ下る島々の詞を早織の詞と遠く
加通せしかへ近侍の人々聞めしも堪かたく給ふの者数しハ島々へ来
のるあハ口なるゝ言てハあしくぬれ書洛南紙くてや [illegible]

言し於城中書記乃衙府ニ至りて尋ろし年廿三ニの人
乃言ふを島ちへ出まへ文章を我らの書てたまわりしとて書法し
に倣ひ居たる島そ驗るき大のことを辞通せ又於書て与ふ何の罪を
んとて廿年まて命して助けん為ニ我持てかへる
島ちハ今ハ才に依りて必ず甚き所あき室ニ到る其時我も出
まて宿ちに出なんれハ彼文章を出して尋ひ給はんと背ひ為にしと出
乃背し事於夏船乃纜を解ハ日本へ帰る事ハ安しと悦ひし
筆船八艘の内ニハ被まて開帆せるに我らを帰すへき様子も見えね
ま心細くたまり毎ひ前乃書記ニ尋ねに出付て書てたまひし島を
然島ニ出し以他ケ　此度ハ島ちへ日本へ帰す様き文書給

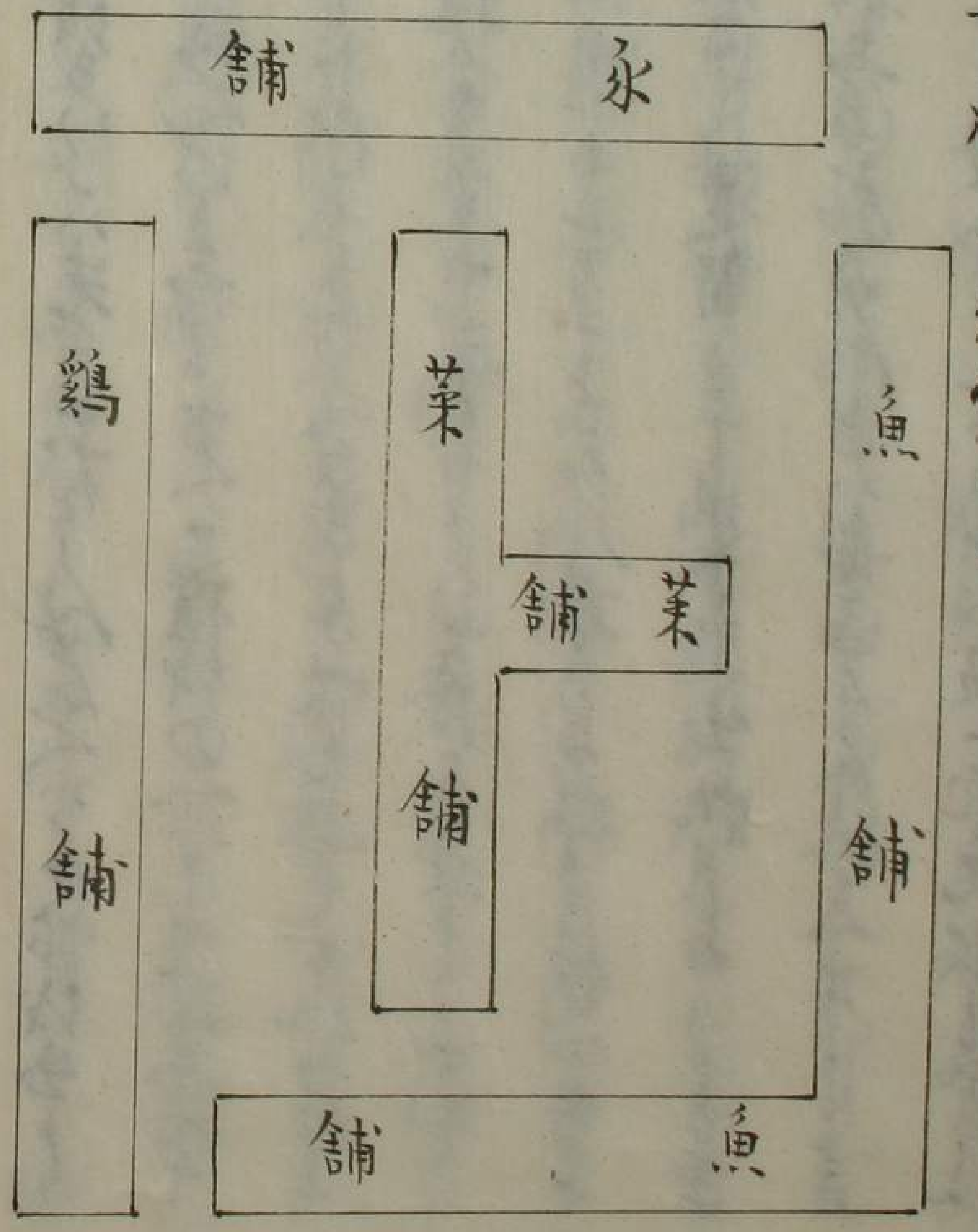
六角郎ハ気違ひ中せし由皆〻六角郎ハ東京乃船人の方へ行
島ちに妾乃所へ行し居て居合せ以平癒致まて六角郎の様子
ハ待ちハ年内帰るとみえ文書我ニて同所ちまり申なり
如中せし於甚郎の門者の所へ行以前の事の東京船人
ハ妾く尋ねハ違ひと申ことしらハ門番ハ送切あして船人の来れ
ちき行島活志て帰るを船人のことやう尋ねて船ちとも扱へぬく
乃金銀我費せし於四人乃費用をも何ちもエモイの船人へ行
へしと言し於エモイの船人へ申まで小エモイの船人ハ申し八東京
乃船人まても費用をと辞し島ちに申し我ちハ今も東京
の船人へ申けるに高言され便怨乃違ハぬ沙せんと思案し

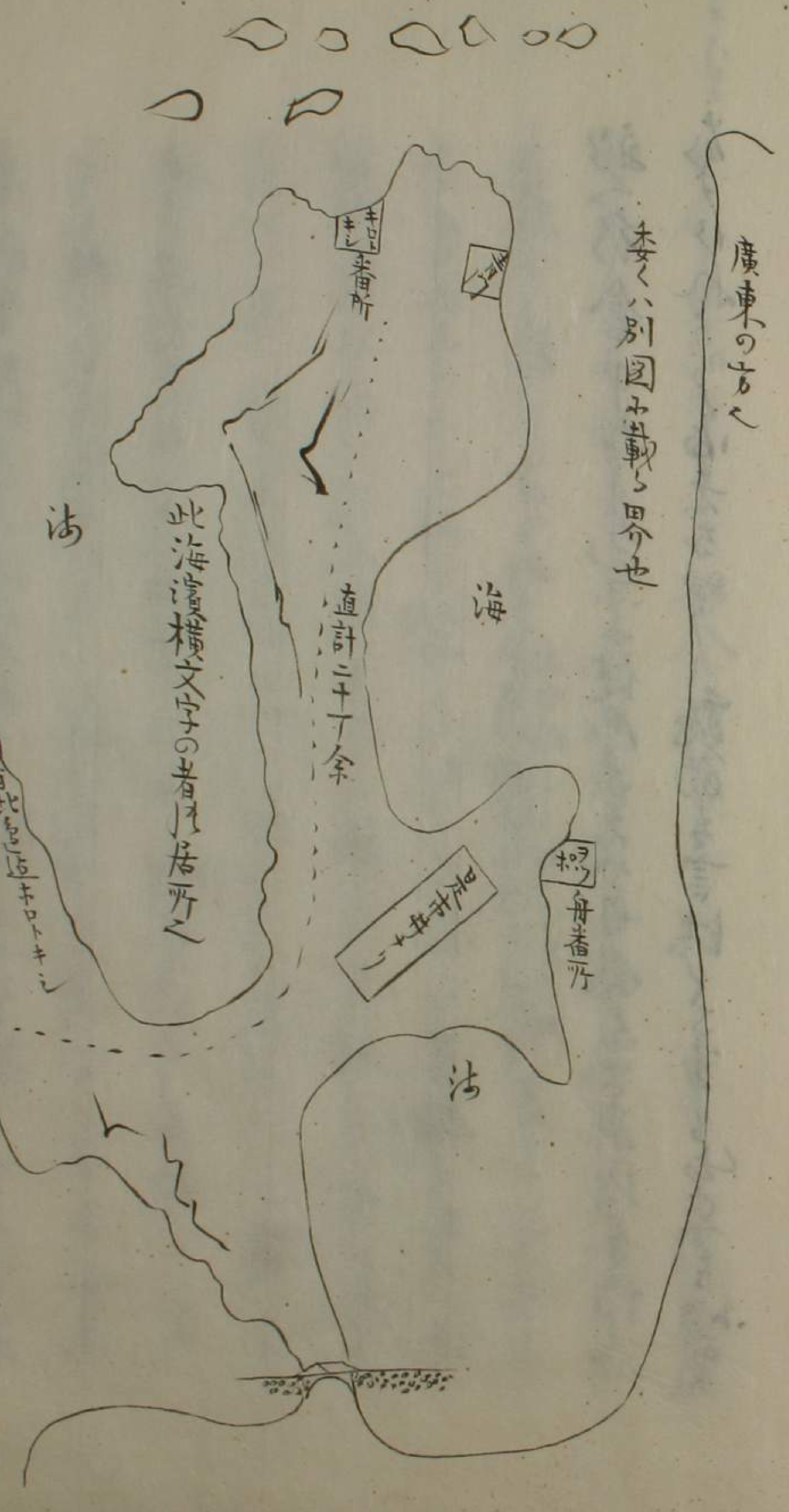
商売しにある船人の言伝せしにて子ラトホに行船のあるに
我々を乗せ呉候様と達而頼しかは即ち中のカベタンの
所へ皆々同道し右船ノカヘタンへ對談せしに同船を無き旨
子もあれハ又此度も行先中ゟに送り右船人をあしらう云
我々ハ此方の船にの乃行へしとて此の如き船ハトンホシテンに至
云者へ試四人を同船して乗せと云ふ文書を認めてトンホシテ
ン乃方へ行し大形文書をとらせて快からぬ由ハ大に嘆き候へ
是ハ論方用候と申ぬ乃ひ今二三日もたてハ出帆せへしカヘテ
まての手紙中を渡し二三日経てカヘテ乃行し又未出帆せぬよし
而して子ラへ帰来るものも又来れとも知れやせんとトンホシテンの

本へ行船へ乃手帖銭なと先ゟ余分たまへ渡しへハ手帖銭出し
くれ候由にて子ラの役人は志ある方へ一禮銭の心ハイツ一箇出て
漁船を雇ひ皆々并銭をカペテへ遣し手帖をとらせれハ船の
の賄食事等をも致させ候へ三日程て七月廿日比より子ラ
始まるカベテの支度トンホシテンと云へ来り候へとも何の事も
やらす七月廿日頃迄て逗留して支度出帆しあらすトンホ
シテン快からぬ同船之者ともハ毎日手外のものたまり言
合ひしや船中毎日難儀致し食事ハ飯一椀宛水も食後
に一小椀銭の手当ハ水無の上て毎日たまの飲水兩
乃降るも構ひなく肉魏鈞浮腫して悪しく

大雨頻ニ降り晴て後烈風ニて 洋之浪船を打こと二程一日波
乃母ふ郭をうち来りて漸く八月中の比澳門と云所ニ至る又此
ところ漢越す門并 下方木ころにて候

澳洲魚菜舗市廛之図

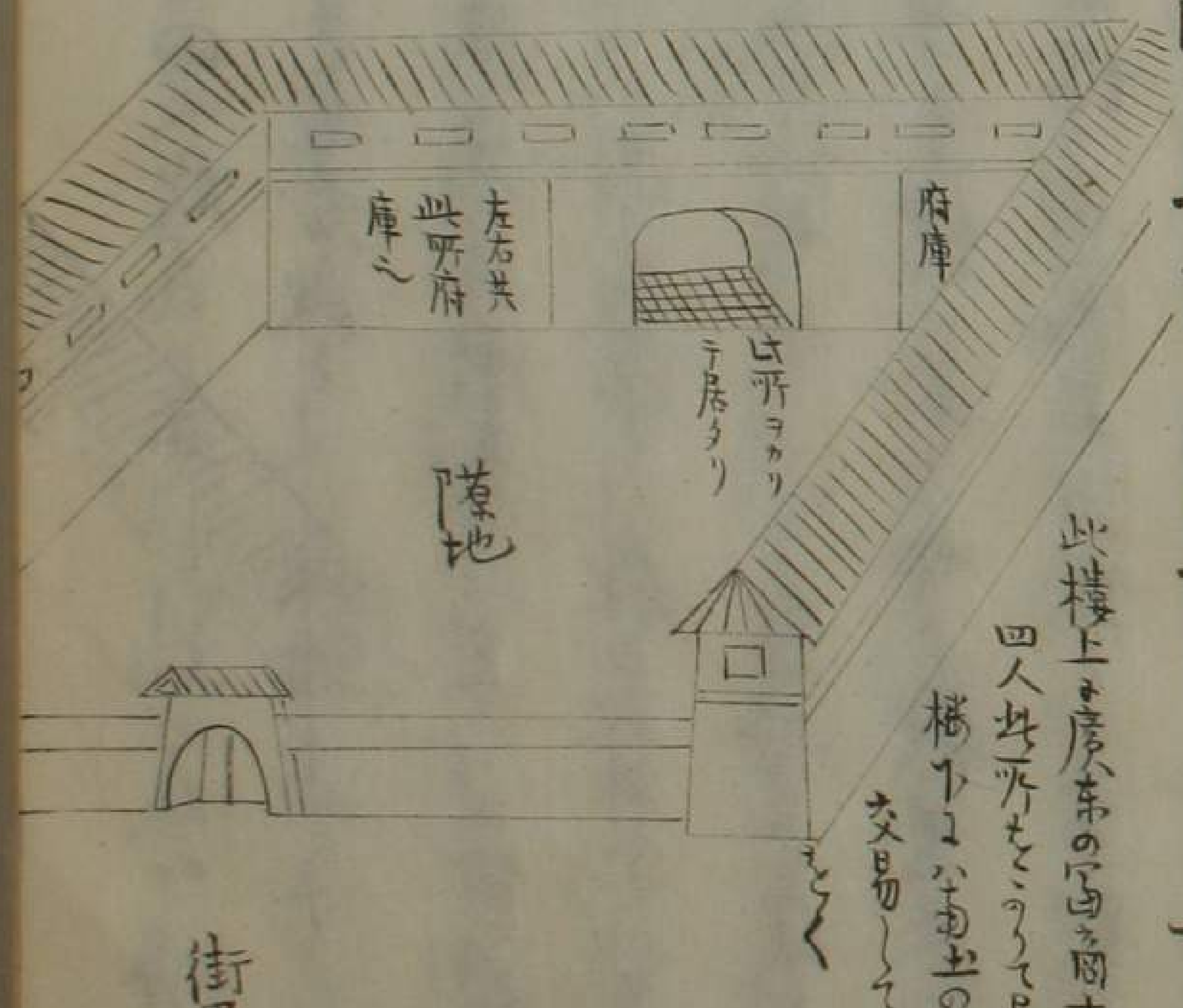


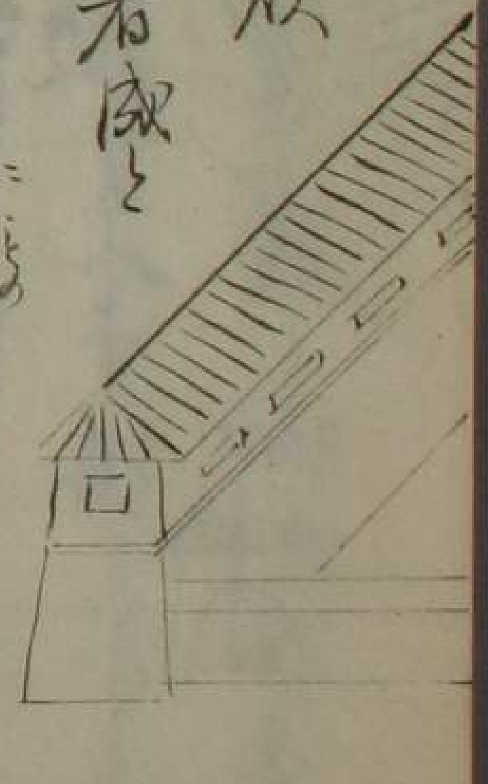


澳州にはくとヨツホウと云廣東よりの出張所あり船を我吟味せし所にて處よりて
子ラ船業験の為め五六人船に来りて支事船より下りたトンホ
レテン秋を同道せしが陸上にてトンホレテンたる寺為れ共志
まず其内トンホレテン街里に出るを我見留めしが我らをれの
志のふとことなりトンホレテンの宅に我ら共に家族として掛りえ
論方なくて子ラ共に人々の見物に来る職として若舗にて食の旅を
もして二三日宿所に寓しかとも後に若舗にかさね海
海道の旅泊の疲労も見え甚宜しからぬ
為に旅行致すとも丈夫にて子ラ
船への食事中たえ此志不健なる共々毎人分ることの終りて
為よれいるかは病気なり龍弱と言ほくる事も出来まじめの

按ニボルトキスなるべし

せんと思ひの手より船へ乃行をとなせて始てトンホレテンの宅に入れ
をとられ平郎ホロトキンの治所為にハ出で女船にハ移りきす
此事我不得止て下る当ある所に座あくみ我捨集あて上る古庫
我数居為り燕二娘
萬子龍ね御きぬきは
食事も快くし橘泰
郎も船の甚所に居られ
ハ不自由なることハない
龍弱のこ病気まて不階
乃上りなりかねまた残る





銀ニて鍋をかひ来りての八炊
煮して居たり適船へ往けば病者臥せ
てなせれば此艱難の中に廣東の厠養人主人の事もの目
我思ひて食物とらぬ者あり来れば常に形きなきは茶碗
を買て持と厠養人ゆやと食物を取らして旅昔を捷き病
我者ハ又日本に帰るべき方便もあるやと街里に出く
らし事ハなけり病苦に堪ぬ医者を求めて薬物取えて
しかれバ診察して薬物与へぬ病者便もよろしく後また
是より後には舊し文のぬくもりぬ脚腫をきて大蒜と生
姜を煎て膝より洗へてすこしずつやや少く旋あり又目あ

脉をとるなら八脉妄あり

しき所治を求むれバ白き末薬を紙にて包みて与ふ太田
乃ゆる所承る處なく食事に翳暁る此醫甚だ何
医者の称なる常人の服候なく却てかかる病には病家へ
出来診察して後ぬ此書を持ちて病家へ残し置く病家は
是を以て薬物を取なり薬一帖を半紙を四角に切り

小青龍湯		
麻黄何匁	芍薬何匁	干姜何匁
甘草何匁	桂枝何匁	細辛何匁
五味子何匁	半夏何匁	

右その紙へ名何ふりと調合
し薬して薬をあけぬなる
數のむ病気のごとくし此医者にて南聲を志てと医の論
家に商家ありあるいは壹貫すと見えたる人を見たりぬ板を書かれ者
他国の術なく年正月に至り始めて歩し此外れ八郎は

彼まぬ外の志ハ健に偽のハ飲食のならぬなりけれバかく
拙集めけるに世人とも読ミし清寫拙ともんとて各祈念し蔵
なりしに四月に帰朝ありけり又ところに五月出嶋の辰の
術府邏所に往て彼ハ何の手かゝりもなくして彼にやま
く志なりし商家へ往て彼書抄書てありし事と転め大後能
拙急迄しやがて人まゝ寸足下の書なる拙事なる稚く寫しとく
あらん事ある彼此も再三乞ひて草稿拙なるぬ彼状の紙拙朱ある紙に
てま紙のまゝ旅りして打本かし表紙の付なるをなさかひ楷書なるへしとあるに其草稿のぬく三
行宛に摹寫し只章まゝ清書と書なるのゝ見え彼医志の所へ也きゝ是を街
府にあらんとれなる事なりよりとこさせし小医師見たとて此文章

小金をと乞の文ありて何しくて来りしかれなる拙又打本拙くら
て摹寫しラツホへ皆く連まるま彼状をあれしに言寫して
そうつき乃方とて見へ持行しに是をハ悪しホロトキしのホロ
コナトル件方より手帖を持来りハ廣東へ送るへしトしホしテしの
對あるき友なりと申をし石銭ホポロコナトルへ行ても辞通せぬ不
端国へ来るも委く書ありまゝと乞の書ハ書てくまゝなりけるぬ
彼状とちかくと拙ホロコナトルの方へ持行しにホロコナトル無
番筭家なりラツポなる楷書けるも人へ手紙ありし此本無実
雑居の他なるは番人家に通せるに番人のホロコナトルへ行拙
待無人に解譯をも乞ひなりまて子ラトなる手帖ありしハあらぬ

来り人にて子ラへ帰り手帖持参致しホロコナトルの申せしと
英人乃云ふれは再ひて子ラへ帰りて何日か日本へ帰り候を
存しまけれとも方便なく又医師の方に於て相談するに
医乃申すには世界へ一年に二三度宛広東より按察使来る
其時銀子を出し頼みなは乗せもらうべし轎を取付まゐらせ候 位
居し何方と聞ハ日本へ帰る由書をもらせんとて数し居
只其のことを待しに右人は来りに付只衙府ときくへは八傳國乃
事を頼へたるトンホレテンの宅まて外に方便なき故
待たり二月十六日トンホレテンにて子ラへ帰国し広東人も
十七日まて外へ往飯くらし入る時トンホレテンの船にのりし志

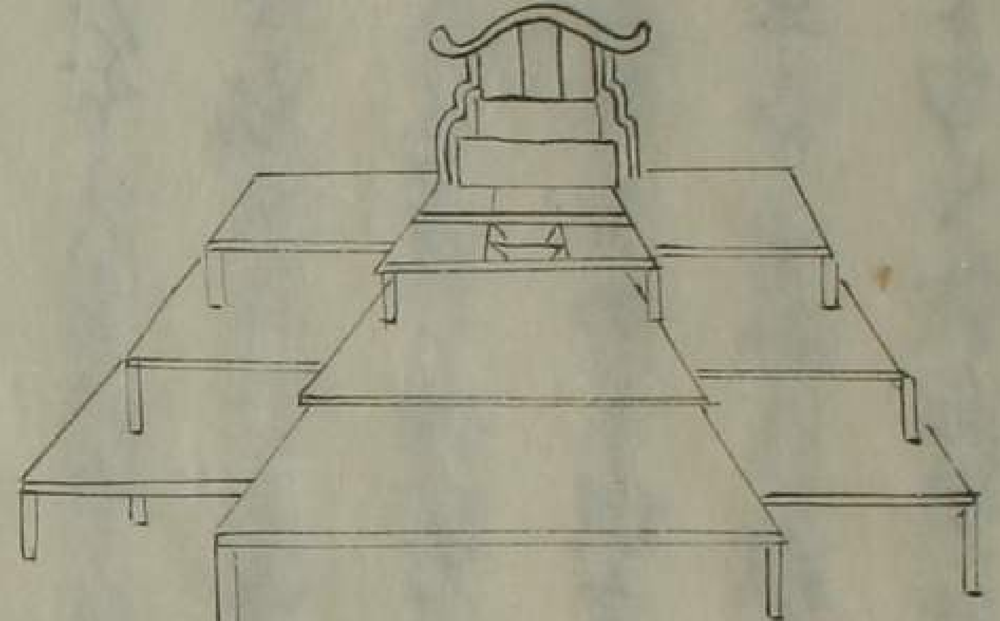
帰りて然るにトンホレテン出帆の前日沙門一人来り（此寺蕃夷の事を通す）皆
乃子供に拾ひて後に私ともに[illegible]を思ひ寺に行
われも其始終の事を語り先街里へ行帖持参を皆々を守り
し下銭銀持参りひ候或日我らを呼広東への文書出来
候とて読み聞かせれは左の通り（沙門も皆 蕃子坊主）又此日来りと言ひし
其翌日出ハ文書出来候由ありて子ラの詞にてよろしく頼みし
其まゝ右の我らの言ひ広東まて誰の船に乗るとたつねし
誰とも申さす只トンホレテンの船と言ひて又あしペセンテンの船に
乗ると言ひしに此時二月の比なりしやうし
心もおし[illegible]

トンホレテン出帆の時船より働きてある燕二娘ノ硝子の壜（トックリ）を
罡十も入れ置り此壜ハ四方の商船酒を入置ことの又来を受
て飲むの由ものハ用ありてせる小船にてハ志やまに寄る所そ入るる
事ありまた所もあるよしと甚あきひ待し
此ま芝居あり 祭事のある節ハ三日より七日もあるよし札付なし
立物ハ見物まやくしやハ廣東より備具を出し舞臺ハ神祠の
前にむけこしらへ六尺程に仏よく根太なし板をしき四方垣なく
かくや小垣あり 忠家根ありかむもんハ舞臺の上にかく
衣装ハ緋ら志や猩々緋錦繍甲冑ハかりて画にかくごとく 楽器
ハ喇叭三味線（日本より少く音高くし） 太鼓銅鑼太平簫（チャルメラ）木太鼓（専にして差渡四寸）

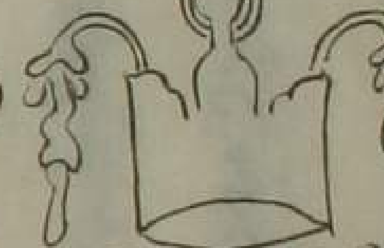
（らうあるサ八十位之）鈫戟槍六尺までのものあり 鉄炮弓あり 幕
道具あまたあり役者ハ頭白をつけまた口に食床付けしき
ものハ銭ごとく重てハ上に居しき倚子に坐せ大將のめきまき居
事り衣装ハ女を待やうにして志ある事 甲冑具又ハ装束にて居るも
あり冠さ備くりて其の共ごとく観ものハ胡出のよう等ハ方近
菓子うりも来るといふなるもあり 女ハ横文字の方に女の見
物まい人數（ニンズ）さかく狂言ハ色々之虎役く出て牛猪なども
出る事あり戦場の者あり戦場にて銭まい大姦通（かんつう）まで志るるや婦人を
つれてゆく戦役けけてゆくる由なり

芝居之図

神祠ある石櫛もあり又ミ方ゟそて葦ゟあけ屋上をかり
瓦ふきもあり惣て家居なて子ラ怪むし

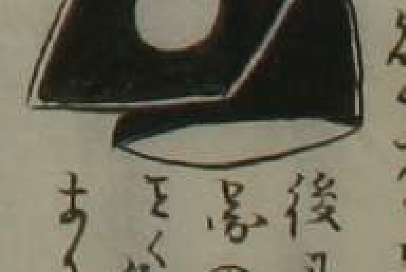


官人の冠



是ハ金ニて製し天子抔やうるの冠

是ハ盗賊又ハ狂気もの漢子あるの冠

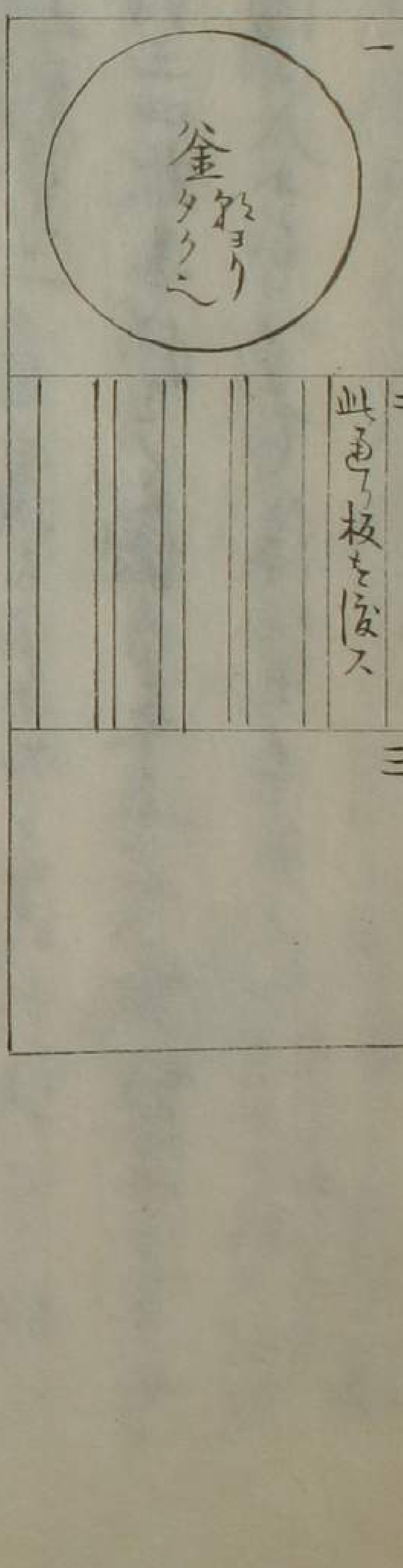


是ハ卑賤の者の冠 後ろ母の字く紋あり

此土かく蠣売灰焼やくところに鉄釜の底へ孔をあけ岸を
蠣から㒵合して釜中に入置錐羽根をもて仰ぐる団扇を足
みてあふく蠣から焼減なる時ハ又入る
魚舗にハ棘鬣(たい)魚、海鷂(えい)魚、鮭、蟹、蝦、王餘魚(カレイ)、鰮(いわし)魚、鰻(ウナキ)、鱧、
文鰩(トビウヲ)魚、鯊(シヤウヲ)、鯽(フナ)、鯵(アジ)、イシナキ、チヘツセ、
菜舗にも多くこさるゝ茄子、萊菔(ダイコン)、胡蘿蔔(ニンジン)、南瓜(ホウブラ)、西瓜(スイクハ)、胡
瓜(ウリ)、壷盧(ユウガホ)、蒜(ニンニク)、芹(セリ)、柿(カキ)、柿もおほかり なるよし
此土にタンカ(蜑舸)といふて長さ弐尋斗ホ横ハ尺ばかりの
ある舩あり皆舟子も女なり蕃夷の舩より行李をみる
人の陸へ往来するにも用ゆる舩之大さハまなき女なり適れつと

あるハ昼ハ傭夫となりて陸へ行程のこ船ハ留守なく船
を家とす寺院もなし廣東まて多く来り
此土正月の比ハ晴天なれハ袷衣にてすむなれとも陰るとハ寒き
時ハ綿入を用ゆる事中にハあつき毛衣も着る也寸
豆腐やあり菜のものとしてよきとうふの類なり椒ぬ(？)の如く
夫故今の世人好みて出ものとして座敷日の薪にハ松
をなし用ゆ
水ハ天水并に川水を用ひ稀に井もあまたなしの水ハ
なし川水濁る時ハ明礬を入澄して用ゆ
花ハ是をかさるに菊の花のめつらしきもの有色紅白にて香甚

高く行さきた雑く跡の白ふかきこと一線にて日本位に
る物売ハ物名を呼て売もの日本のあきなひ芸讀をも
乃事なり
湯屋あり三間四面位衣服を脱く所ハ六間ほとに鍵をやうの
者あり其上にぬきたる衣棚あり湯桶を並て其こに
湯船を上に定あり初の所ハ冷水を入て水を入湯を沸
す 湯桶に入るすきハかこぬのたすき 二ツ目の湯ハたきるあつく湯気立て程よし
上に板を三四枚並べて其上にて垢を洗ふと云
目の湯に入すして稀に出る人ありと云 三ツめの湯にハ人入らぬものなし

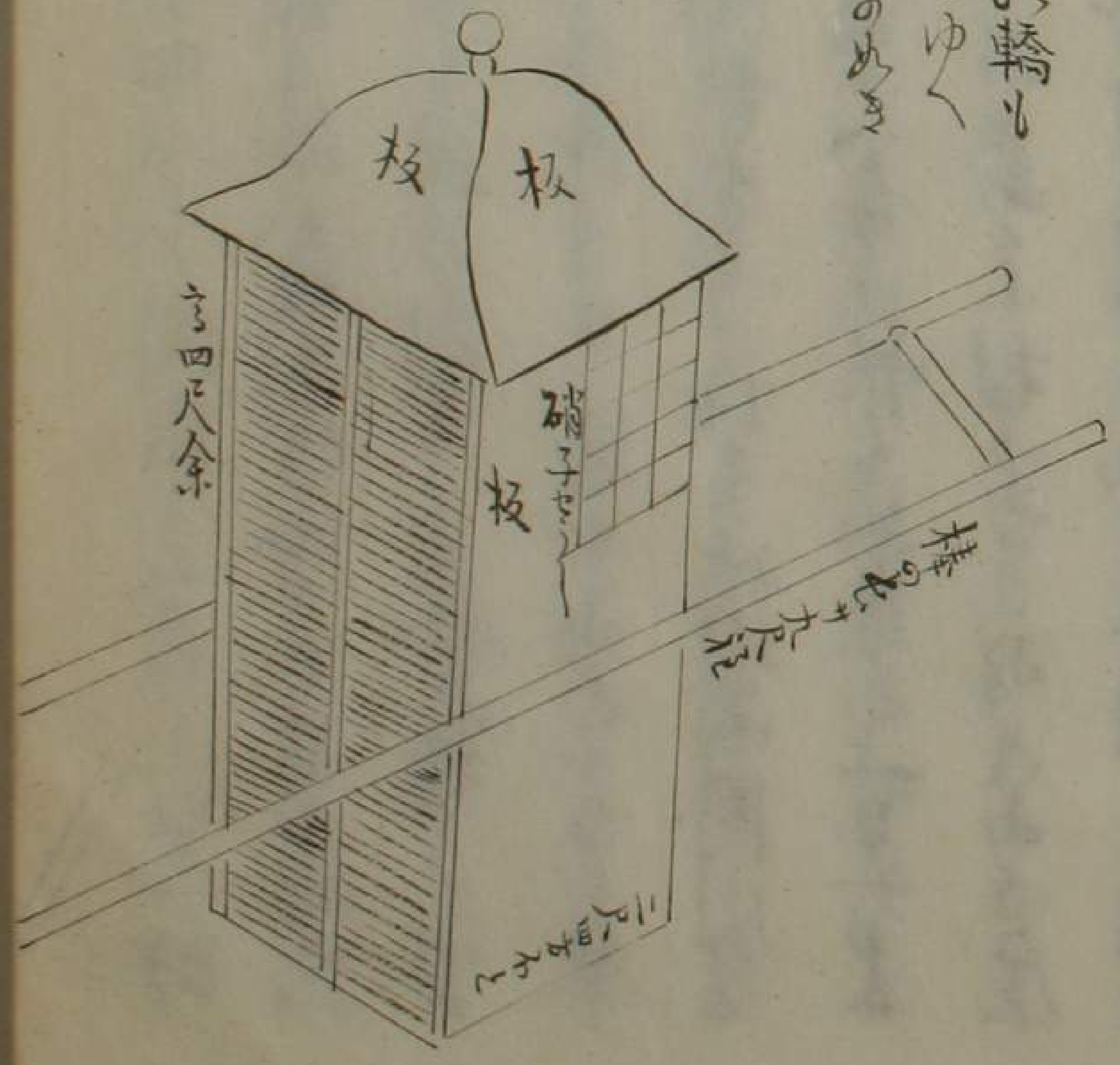


上手ハ至てせまく銀ならハ残らず取て食を抔も快くし只
廣东より迎の者を残らず四月廿四五日ニ陸ホロコナトルの方
よりカントンハイと云て迎ニ来りしニ行くれハ廣东より迎
の来りしより夏人三四人居たり諸々の悦ひなく人々方へく吏
より行装して其日三里斗を陸行して一村ニ到り駅館ニて
午飯して此ほとより雨降る道ハ簑笠をあてふ弟子龍

病気ニて歩行ならざれハ轎ニのる（轎の形下ニ出ス）夫ゟ駅舎ゟ保長(ショウヤ)よ
りもあるや図のことき笠を戴き従奴七八人つき隣村り
以来る

てうらも同しホロトキこの男女轎も
皆ほとく小して四尺四方ほとゆく
四人ニて舁く夫人乃斗八日本のぬき
して作るなり

清朝の冠夏ハ赤き毛を冠のぬく
かしらの処より下る頂きの
玉石木晶銀真鍮の類なり
官の差別あるといへとも
むらさきとらんきのあみて笠ニを
もり赤き絹糸を冠ほとく
下る冠の色朱を見る官
のよし



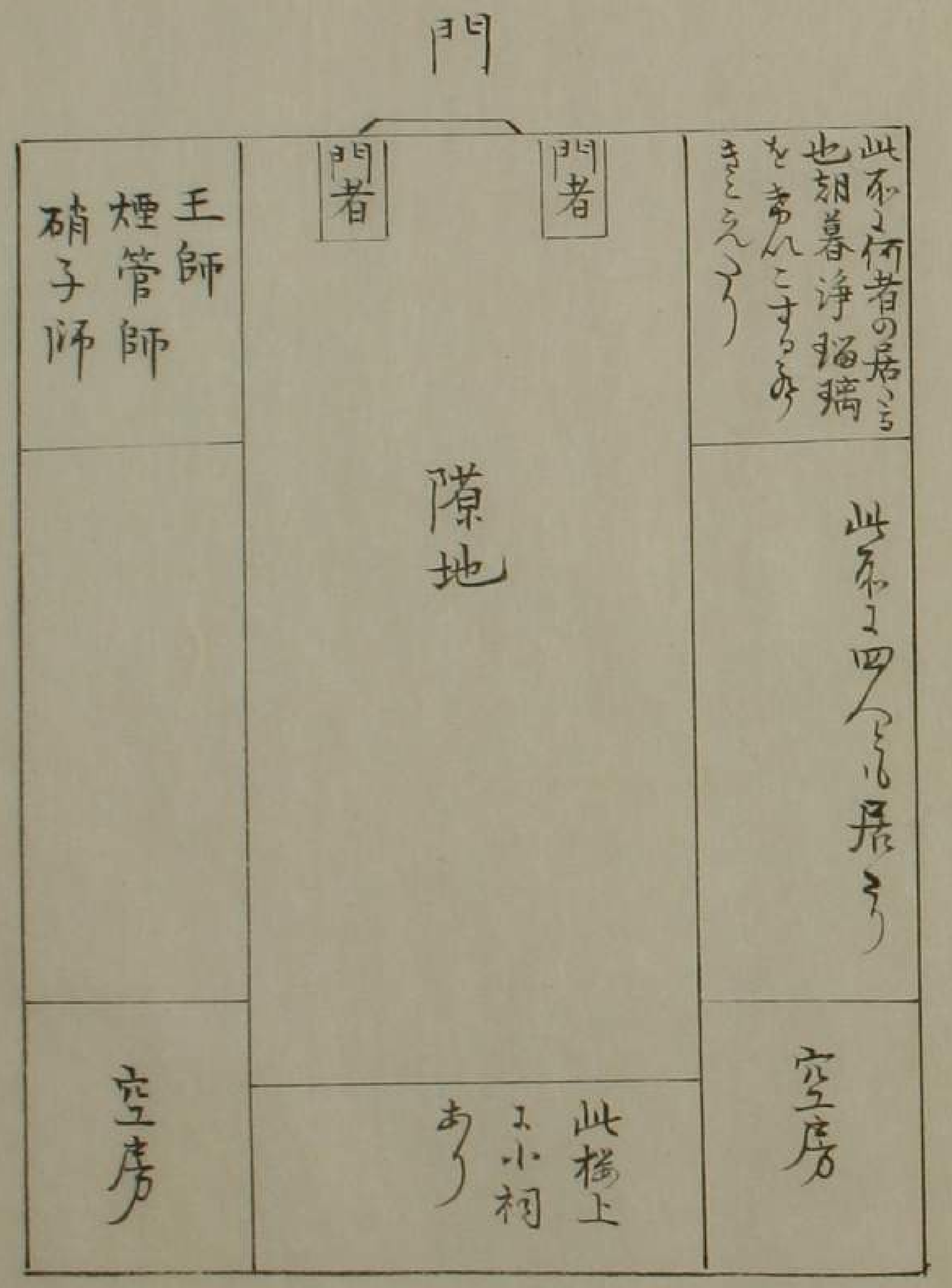
此所にて寺に止宿し　翌朝おなし所より此所を出て天朔といふ所に
至れ　午時まで此所に此郡甚大なり館乃額を見るに天朝乃二字
有り　此所まて道次皆畠なり　所々より遠く山のミ見ゆる然
ありて是より川船にのる　橋も此所より掛る　此川西国川と
云ふ　廣東近くなる所にて甚大なり　帆をあけて一日一夜
にて廣東に到る　凡そ行ほとの間　山ありて村もあり　邪も有り　廣
東ともいふ所にて水早く流る　川乃正中に二拾間ほど十間程
突築にて島山あり　三方石垣にて　島ニみあけ　一方に門あり　内中に
石階あり　樹木なとも見えて　小祠もミえて　数百艘の船繋ぎ居る

中にも楼船のきらやかなるありて　硝子障子抔中に粧ひたる
娼婦もあり　又タンカ船のぬくく織き舞娘乃舟もあり
商船あり　漁船あり　其街里を見るに　頗大にして目も拖
かるゝ　素より城もミえす　只遥に山ミえて　川のあらゝに
も余程乃衛里ありて　是より八波船にて往来に掛　廣東
へ到る　是より船を上り　衙府へ達しぬ　是　川を往くに
て子ラ乃家ぬく　華人の家もまたくる　石垣にみあけ建
るゝの拾壱程乃の家十戸ほとあり　四方に行馬やらいあり　其
家を出して子ラ人乃来る時住居する　所なりと由　扨衙
府まて官人来り　是より四人にて衙府に止宿し　翌朝

一ツの空房(アキヤ)ニ皆ミな朝夕食事ハ中宿への料
理なり
凡人家に入れハ床は皆錦の毛氈あり敷物にかへ是
内にて靴を脱ぎ客来る時ハ主人冠をかぶり出迎ひ
更に拝し椅子を勧むれとも女ハ禁にかゝはらす肩
と膝とに手を当てゝ腰をつき行ちゝ丈より揖くす
詩語を
女ハ外へハ猥りに出す皆ゝ居室中にて細工事に衣服ハ
仕裁やすく縫せよし凡人の妻ハ志猥りに男子と語る
事を禁す話する時ハ竟に傍深く對面せしむ年寄

纏足

き女ハ往来を敢て稀に年配五十余の女ハ歩行すれ他
成るへくも歩行せす轎に乗る日本の丁駕籠の如く業と
する者ありて是を担ふ也轎の形日本の神輿に似て屋
根の上四方へ反りかへりて形く根を作りて窓の方に簾を
かけ三方ハ紹紗の類にて囲ひ二十四尺ほと幅を弐尺四
方くらゐ中にて腰かけ棒を左右より中ほとへ一本つゝは
くる
女乃足ハ甚た小さく小児の如くなれハよく生
て其の大いさハ小さく下賤の者ハ大きく衣ハ
膝を過る程長く袖ハ長く袖口ハ引ずり…至てや

せんやうのことハ銭足をはく売るあって茶後ニて
あハ寸小児へ乳銭のまゝなるも人の目ニまちハのません湯
ニ入ても風呂の入口へ設銭お結まと
広東ニ居る船ハ他へ出ることなき稀ニ是ハ只門茶ニ
乃みたまみなり

上ニ朱書するところハ椰蔭先生の考也　仙臺大槻玄澤